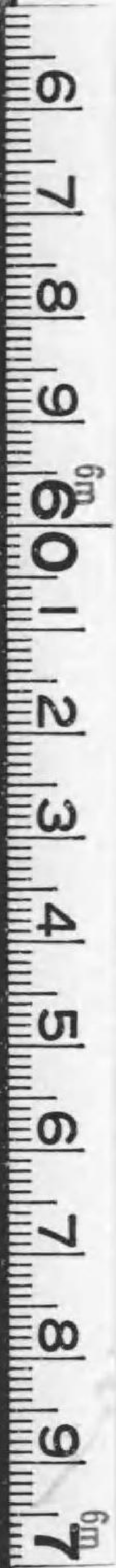


蘇州府志

特261

911



始



特261
911



選



本集に就て自から思ふ所を記す

笹村良水

此度知己の方々の御厚意で私の歌集が世の中へ出る事になつたのは誠に有難い事である。就ては茲に此の歌集に對する自分の考へを一通り申して見たいと思ふ。そも／＼私は歌は自然に感じた情緒を詠み現す其時が愉快であつて、其後になつて歌によつて其時の事を回顧する事や其他の事は第二の事であると思つて居る。然し人間の情と云ふものは妙な物で、その詠むだ歌をその儘其時ぎりにして書き留めて置かねば何とも思はぬが、歌誌か詠草帖などへ書き残して置くと、後から見ていると第二義的な愉快が湧かぬでも無い。こんな具合であるから、自分の歌を整理したかどうかと云はれて少しやつて見ると、又一種の面白みを感じるのがあるので、其れはそれとして此度此集をまとめたに就て、私としては案外な大なる收穫を得た事が有る。其れは即ち斯うであ

る、今までは詠みつ放しで有るから、多少記録して有つた所で、首尾を連ねてよく見れば、見た事は無かつたのだが、今度それをよく見ると。ばらばらに見て居ると其癖が割合に目に付かなかつたが、順序を立て、並べて見ると、いかにも悪い癖がハッキリする。實は今少し詠めて居るかと思つて居たが、或る見方からすると未だ十分に歌に成つて居ない。よく考へて見ると、これから大死一番一切を捨て、大更生を爲なければ物に成らぬ事を悟つた。是れが私として此の集から得た極めて大なる收穫で有る。それならば、そんなくたらぬ歌を世の中に残すは恥では無いかと云はれようが、そこは又それ相應な理由が有る、それは、何に恥も何も有つたものでは無い、私が今迄くたらぬ歌を詠んで居たとてそれは私の恥では無い、私は偽りの歌を詠んで居たのでは無いから何も恥る所は無い、何も自分を飾る必要は無い、それよりも笹村良水と言ふ人間は、こんな歌を詠んで居たが仕舞にはこんな歌を詠むように成つたと云ふ様に成りたいたので有つて、又其の事があからさまに分かる方が面白いと思はれる。

私は今度集めた自分の歌集に由つて自分の既往を客觀し其の得た力によつ

て出來得るならば、眞の歌の道へはひりたいたと言ふ心が熾烈に成つたのを、眞事に有り難い事と思つて居る、つまり此の集は私の既往六十年の思想雅懷の精算で有るが、將して是れから更生し得らるゝや否やは、自分でも判らないので有ります。

六十路經て付きまとひたる悪しき癖

幼なごゝろに歸り得るやいかにかに

○本集を連年體に編したのは其の多少の思想の變遷を知るに便ならしめん爲めである。

○本集の歌は前後卅年に渉る期間のもので有るから、今見ると随分修正したい所があるけれども、それを今取り直しては、即ち現在の歌に變る譯であるから誤を修正したのみで其他は可成補修せぬ事にした。

○明治時代の詠は未だ十分確たる歌の上の考がきまつて居らぬ時代で有るから全部捨てやうかと思つたが、能く考へて見ると日露戰役、明治天皇崩御等の大衝動によつて自分は少し歌の根底が出来た所が有るやうに思ふから、其實詠のみを抽て終りに付けることにした。

○此の外に研究的に詠むだものや題詠などがかなり澤山あつたけれども皆捨て、しまつた。

自詠

笹村良水

大正

大正二年詠

初春の歌に

新世の春にはあれどすめろぎも御喪にこもらず春にしあれど

夏の歌の中に

朝嵐の吹き越すあとのいちじろく見ゆる岡邊のみづ枝すゝしも
たゞ一人足ふみのべて眞清水のおと聞くやどは夏も訪ひ來ず

野外に月を見て

草むしろ敷きつゝ待てば野邊遠き森の木の間ゆ月はいてにけり

連日雪降りける頃

しなざかる越路はさぞな都さへ昨日も今日も雪は降りつゝ

折にふれて

はご掛けて取らくも知らず耳木兔の囿つまむと寄る小鳥はも
笛の音に群れ寄る雀人ならば餌さしが待つと告げやらしを

目と云ふ題にて

幼な子が口に言ひ得ぬ喜びを見する目もとのいつくしきかな

手と云ふ題にて

物ごとにあせらむよりは手むだきて我れはありなむ心澄むがに

○

新年

同三年詠

明けしらぬ夜べのさわぎにひきかへて大路静けく年立ちにけり

春の歌の中に

里遠く藁打つおとの聞こえ来て雨ちかげにもかすむ月かな
舟の子が油買ひにか上り来る夕川のべに雨かすむなり

秋の末つ方

この秋は間なく時雨のかゝればや思はぬ木々の色にいてにけり

冬の歌の中に

我がやどは櫛の木だちの多ければ夜なよなすごく木枯の吹く

冬の日のかすむ汐田のをちこちに走る千鳥のおもしろきかな
夜をさむみ折り焚く柴のしばくも打ちおどろかし降る霰かな

猫の子を

爪かくすすべだに知らでとりくくに痛きめ見ては小猫そばゆる

高島豊、萩谷勇吉兩兄と初臺なる大谷以道ぬしを訪ふ、在らず。

我が如く今日の日和にあくがれて君も出でしか訪へどいまさず
初岡のあるじを訪へば家にあらず軒の日當り目ざし干したり

やむなく代々木の原を過ぎて歸る

野づかさに尻落ちつけて握りめし食ひく居れば午の刻過ぎぬ
世の事の何もわすれてかげろふの燃ゆる枯野に飯食ふ我れは

又下村、山村、大高のぬしなど交へて戸山の原を過ぐ

大塚ゆ目白高田とよぎり來て戸やまが原に足ふみのばす
野づかさにすわるはよけど刈りばねに尻ないたためそ大高の翁

武藏の國分寺より府中を過ぎ多摩川を経て百草に遊ぶ

國分寺にて

こゝかしこ堇花咲き古がはら散りほふ庭はほとけさびたり

そこより府中へ出づる畑道にて

春の野にやすらひ居ればいろくの小鳥聲すも風おだやかに
はるの野を雲雀にのみはまかせじと聲をほにあぐる眞鶉頬白

大國魂神社に詣つ

五百枝槻並べる奥にふとしかす大國魂の宮居たふとし

佐々木ぬしへたはぶれに

先へのみ心をやりてながき日を足いそぎすも歌詠まぬあせは

百草の岡に登りて (長歌)

百草のうしろの岡に 木の根ふみ登りて見れば 打ちわたし霞む
かなたに 立川日野の里見ゆ 過ぎ來つる關戸の渡り 國府の里
も見ゆ

又

うちつれて野行き山ゆき河原ゆきあそぶ此の日は暮れずともよし

井の頭に遊びて

池をめぐる若葉のうれに村雨の降りては晴る、けしきおもしろ

子供らをつれて王子の瀧に遊ぶ

丘の下をめぐる王子の里ごしにつゞく青田のながめすゞしも
名ばかりの瀧にはあれど掛茶屋のことそぎたるが涼しかりけり
瀧の音を聞きつゝ居れば丘ごしに木の間をおろす風ぞすゞしき

富士の裾野

心の合へる友どちと富士の裾野を見むと出で立ちしは七月十四日なり、

道は御殿場驛に下車し鐵道馬車にて籠坂峠を越え、山中湖畔に一泊し

翌日吉田を過ぎ河口湖に至り大月を経て歸る。

松田のあたりにて

草の家の背戸のたかきび穂にいで、朝吹くかぜは秋めきにけり

須走村を過ぐる頃

丈にあまる狐のたばこ打ちなびき山ふきおろす風のすゞしさ
はるくくと見おろす谷は道にして小さき馬車の登り来る見ゆ
足遅き馬車のゆく手にいつかはと見てし籠坂つひにのぼりぬ

峠にて

駿河路ゆ甲斐に打ち越す籠坂を雲とともに越えてけるかな
子どもさびあらむかぎりの聲たてゝ遅れし友を呼びつゝ立てり
霧のごと裾野をはしる雲さきに水かけひかる山なかのうみ
やま風に雲のおり来てをりくくに軒端かすむる籠さかのやど

山中湖畔に宿る

湯あみして宿のはし居に見おろせば静かに暮るゝ山なかの湖
みづうみの鯉をさかなにビール飲む山中の宿は見しよりもよき

畏こけれど「忍坂の大室屋に」と云ふ御歌に習ひ奉りて（長歌）

山中の湖邊の宿に 虫さはに入り居りとも 虫さはに來入り居り
とも 高黍の高はゝき持ち 掃きてしやまむ はきてしやまむ

登曉早起湖を隔て、明け立つ巖峯を見んと行く

有明の月かけ澄める大空にかぐろく立てり富士の夏やま
カッコウの鳴く音しづけき山中に明け行く富士の高嶺をぞ見る

此日下村ぬしと別れて吉田へと下る

よべの夜さり貉と共に籠坂を越えしといふセナと連れだち行くも
下村のあせは伊豆へとかの見ゆるたむけの道をひとり行くらむ
四人して飯食ひたりし籠坂のたむけも見えずなりにけるかな
道知れるセナは武藏の青梅人其の名を問へば清水萬造

船津にて

汗にあえし衣ぬぎ捨て青淵にとび入るこゝち何にたとへむ
おもしろき青梅の萬に別れかねともに伴なひ共に飯食ふ
風きよき船津のやどのうたゝ寝に旅のつかれもゆめとなりぬる

歸路

高きびの中にもれて棟ばかりはつかに見ゆる家ひとつあり

此旅に嬉しかりしは須走の馬子 北口の吉田の媼袖の萬藏(長歌)

相模川の上流を(長歌)

北口の吉田の野邊の 路のべの水清き溝 河になり谷になりつゝ
山あひを下るを見れば 川の名に桂と云ふも 川の名に相模と呼
ぶも之れの川下

雷鳴の折

神鳴れば志奈根祭の松焚きてかしこみたりしむかしをぞおもふ

歐洲大戦のはじめの頃諸國を

英國を

老いたりとは言へども然かすがに世を知る人の多き國かな

獨國を

横ざまに押し、車のくつがへりよきいましめを残すべらなり

佛國を

ありとある力をいだせ勝たざらば國はついえむ敵はしれもの

露國を

はらからのスラブの民を救はむの時いたれりと露西亞人立てり

白耳義王國

やぶれむもよしや盟ひのためにはとふるひ立ちけり頼もしの國

弘田家の名古屋へ移りたまふに

君が住む三年がほどをよき折にあゆちめぐりを思ひた、ばや

播摩より久々にて都へ上り給へる今橋將軍を迎へて

老いたりともとな言へるよ今日見れば八年昔の君にかはらず
逢ひ見れば君若々し老いたりと人の言ひしはなにのそらごと

其折將軍が會友谷田、本庄、大谷、龜岡などの諸將軍と樂しげに
談り合ひ給ふを見て

たのしげに昔がたりをかたり合ふ我が友見ればよそ目うれしも

又 其 折

酔ふために酒は飲むもの亂れざる心し持たばみだるゝもよし

皇太后宮御不例の爲め 天皇皇后兩陛下俄かに沼津離宮へ行幸
仰せ出さる

時ならぬすめらみことのいでましに色をうしなふ四方の民ぐさ
大宮のうへをいかにと思ふ折りこはたゞならじ今朝のいでまし

十日 皇太后陛下沼津より還啓仰せ出さる

御かへりとのらし給ひぬあはれく 民等のねがひ終に絶えしか

其の 後

天なるや先つ御かどの御そばにとゆかしたまへばすべなき我等

代々木ヶ原なる昭憲皇太后の葬場殿を澁谷の岡より遙拜して

大前に出づる身ならねば木の間より見ゆる御殿を拜がみまつる

入がたの日影かゞよふ代々木野のはふりの御殿たふときろかも
分けて行く麥生の中に聲するは同じおもひの人にかあるらむ

同じ折銀座あたりにて

かゞり火をちまたに焚きて人皆のつゝしむ宵は更けむとぞする

○

同四年詠

年の始め日暮里なる静座道場に赴く道にて

あかつきの暗き坂路の霜踏みておなじおもひの友のより來も

先つ年梅咲く頃久良岐郡の海岸をありきける事を思ひ出して野
島なる高木翁のもとへ

梅かをる春の磯わの夕ありきかすみし月のわすらえなくに

春の歌の中に

摘みためしうはぎを煮むは野遊びの折にあひたる肴ならずや
つぎ木せむ日も遠からじ長閑やかにかすむ山ばた草も萌えたり

折にふれて(長歌)

尾花を瓶にさし 蓬生の簀の子にすゑて 十六夜の月待ち居れば
ほとくと菴の戸たゝき友は來にけり

音楽會

春の日の光り満ちたる雲のうへに居るこゝちする管絃のこゑ

人より朝鮮の石鍋といふものを給はりければ

ふさはしききしを煮むか神代さび鹿のしゝ煮むか高麗の石鍋

浅間山登山

去年は富士の裾野を廻りぬ今年は浅間に登らむと友と四人して七月十五日朝上野驛を立つ、午時少し前信州沓掛驛に着きたるが、夜立ちし曉をかけてみ山に登らむがよからんと、此所にて暫し英氣を養ふ、午後十一時、時はよしと沓掛を出で裾野の道を登り峰の茶屋を過ぎ曉頃より本山にかゝる、椴松の林を過ぎ小浅間と云ふ側火山の横より登るに頗る峻なり、此邊を行者返しと云ふとぞ、此所を登れば突然高山植物帯となる、朝日は上州赤城山の彼方雲海の果より昇る、植物帯の盡くるあたりより道は又急となり地獄谷と云ふ谷を成せる所の上を横切れば舊噴火口の邊に達す此邊より上は小さからぬ焼石散亂して足もと危し、九時頃絶頂に達す、噴火口のさまはまことにすざましきものにて、白紫青黄種々の色をなして焼けに焼けたる深き洞の底より地響なして噴き出づる煙は火口壁の周圍より吹出づる幾十條ともなき白煙とまつはりて大空に渦巻き昇るさま、さすがに壯大を極む、十時頃絶頂を離れて下山の途につきぬ。

出發の前夜

四人まで友はそろひぬねがはくは八大龍王雨な降らしそ

荒川のめぐみ知られて打つゝく水田はてなし熊ヶ谷のあたり
はつかなる流れのみにて神流川たゞまじろなる河原なりけり
上つ毛に入りしもしるく右ひだり雲居る峯の我れをむかふる

沓掛驛に着きて

軒ふかく奥ゆきひろく屋根のうへに石をならべし家のみにして
さと人は今日を祭りと大かたの若き老いたる晝寢してけり
うづら鳴く浅間のすその草のはら吹きわたる風は夏としもなし
ゆふ雲のうづ巻くなかにたふとくも浅間高峯はあらはれにけり
ゆふづく日かゞよふ空にたちのぼる浅間のけぶり見れば尊し

夕ぐもは山におり来て吹く風のそゞろ身にしむ沓かけのやど

今宵は夜だちなれば寢て置かむと床に就きぬれど寢られず

信濃なる佐久の郡の沓掛に我が居る今日を友知るらめや
星の飛ぶ空を窓よりあふぎつゝ寝るともなしに更かす夜半かな

夜半宿をたちて山にむかふ

吾がどちが足の音のほかにも音もなき夜半の山路の静かなるかな
ともし火をかざして見ればとゞ松のはやしの中を登るなりけり
峰の火を折々あふぎ烏羽玉の夜のすそ野をわけのぼり行く

峰の茶屋に到る

みねの小屋に爐かこみて山やけのもの恐しきはなしをぞ聞く

名も知らぬ鳥の聲して谷々にむかふす雲はしらみそめけり

曉に峰ノ茶屋を出で、絶頂を極む

雲のゐる赤城榛名を下に見てのぼるあさまのみちぞはるけき
雲の海のはてよりのぼる天つ日にか々やく峰のけぶりたふとし
さしのぼる朝日を受けて雲のうみの波にうかべり那須の遠やま
おほかたの雲をつらぬき大ぞらにたなびく雲はけぶりなりけり
やつが嶽蓼科山のうちこしに見ゆる高嶺は甲斐の駒か嶺
あさま山なびくけぶりの遠方につらなる山は甲斐のむらやま
まろびたる千引の岩のかけに寄りて昇る煙をあかず見るかな
浅間は活ける焼け山今日こそ石し降らさね活ける焼けやま

○

御即位禮奉祝歌

十一月六日 西京へ行幸あらせ給ふ

朝日かけか々やきのぼる大ぞらに今いでましの砲のおとひやく
國民が四年をかけて待ちまちしおほきみのりのいでましぞこれ
かくばかり綾にめでたき行幸は我が世のうちに又とあはめやは

七日 (座頭歌)

我が大君西の都に着きまさむ日ぞ 雨雲を吾妻の空に止めむす
べもが

我が大君西の都に着きまさむ日ぞ 雨雲も西の都をい行き憚れ

十日 御即位を畏み奉りて

高御座のぼります時の近づけばかしこきかもよ日影かゞよふ
天つ日のかげをあふぎて遙かにも西のみやこををろがみまつる
萬歳を呼びあげむ前のしばらくのそのしづけさに心は澄みぬ
鐘の音笛のひゞきにとよみあひて都をゆるするよろづ代のこゑ
神の前にもし火かゝげ大ぎみの御代をぞいはふかしこかれ共

十二日 御即位當日の勅語を拜して

民をおぼし國をおもほすすめらぎの大御言のり涙あふるゝ

十四日の夜日枝神社の境内に會して詠める(大嘗祭の夜)

大むべをせさす今宵ぞ神の前に友とつどひて一夜あかさむ

入日さす豊旗ぐものかゞやきの世にもめでたき今日にも有る哉
西の空はるかに澄みて旗雲のなびくを見ればたふとかりけり
置く霜のさむき夜すがら大ぎみは御神まつるとおほむべせさす
御やしろにぬかづき終へて仰ぎ見れば入方の月の光りさやけし
畏こまりしゞまになりぬ大君の悠紀の御殿にたゝす時來と
大君は神にしませば今宵しも神つどへして御饌きこし食す
さ夜なかと夜の更けゆきて主基殿にわたらす時は近づきにけり
大むべを神もほぐらしさ夜ふかき御前に立てば白木綿ゆらく
八百萬千萬神のよろこびを見るこゝちして星さえわたる
天つ星雲井に照りて大むべのかしこき宵は更けわたりけり

大嘗の夜をいましむる木の音のほかは音なき夜半のしづけさ
大むべのこの夜明けぬと告げわたる長鳴き雞のこゑのさやけさ

市中見る所を

皇民等が祝ふ火かげに大御城のみそらの雲はかゞやきにけり

廿八日御還幸あらせ給ふ

大き御典終らしまして吾が大君今日ぞあづまに還りまします
御車のけぶりの見ゆるひと時に人のとよみはしづまりにけり
市人がしのびあまりてよろづ代と呼びあぐる聲に誠こもれり

皇子御誕生あらせらる

君が代をめてたき折の上なきにをのこ御子さへあれましにけり

天なるや日月の如く何ごとも足りにたらへる君が御代かな

十二月九日上野公園に行幸あらせ給ふ

市びとの心あはれと大きみは今日ことさらにいでましにけむ
御くるまの覆ひ開きてわたらせば都の大路かゞやきわたる

○

同五年詠

苗代を

つばくらめ飛びかふ門のなはしろにかすむ朝日のかげの映ろふ

春の歌の中に

かはづ鳴く小田の井ぜきの餘り水おとの長閑けきこの夕べかも

埼玉めぐりしける折

耳なれし物の音もせて千町田の蛙の聲に澄むこゝろかな
春の夜の雨夜しづかにかたらへば世の何ごとも忘れにけり
千町田の蛙聞く夜は故郷にかへりていねしこゝちこそすれ
黒鴨の群あそぶ川邊につい居つゝなびく眞菰を見るがよろしき

夏の歌の中に

ほとゝぎす折々鳴きてすゞしろの實になる頃の雨ぞよろしき
さ夜なかと夜の更けゆけば夏の夜の月もさすがに露けかりけり

秋の歌

さ夜ふけて聞くぞさびしき背戸やまの杉生を過ぐる秋かぜの聲

秋の歌の中に

千五百秋みづ穂のくにと神代より名に負ふみ國秋ぞよろしき
木の葉散る音をさびしき聞き居れば今日しも秋のゆく日なり梟

市内より澁谷へ移り住みける頃

大ぞらの廣く見ゆるをうれしみて丘のはなはに登りては見る

野庭のほと云ふ所のみ寺に高島ぬしを訪ひし折よめる中に

夕さればこのもかもの谷間より煙ぞのぼる家も見えなくに

關西旅行中の高島ぬしへ

たゞひとり山坂越えて道のため旅行くきみは今日も行くらむ
我が友を早や歸り來とおもへども道のためには然かも言はれず

札幌なる岩倉大良ぬしが始めて訪はし給へる時

へだてなく思ふおもひのかよへばか初めて逢へる心地こそせね
同じ折「友自遠方來」といへる題にて

文の上におもふ心はかよふとも逢ひ見る今日にあにしかめやも

○

同六年詠

探梅といふことを

名どころは物ことくし山ぎとのおのづからなる梅を訪はゞや

埼玉の蒲生なる正藏院と云ふ御寺にて

しづかにも山ばと啼きて橋のはな散るにはに小雨降るなり

蟲の歌よみける中に

萩の葉にさはる夜風もしづまりて蟲の音のみになれる庭かな

紅葉を

山ぞはをめぐりて登るたびごとに紅葉のいろの濃さまさりゆく

人々と共に鹽原の紅葉を見むとて行く

道すがら

赤松の小松がはらに朝日さしきよくも澄めるあきのそらかな
秋のそらかすめる遠にほのくくと浮きても見ゆる富士の雪かな
箒川うちわたりけり水きよき此の川かみやしほばらのやま

鹽原の山道にかゝりて

末遠く落ちゆく瀧を下に見てたどる岨路のおもしろきかな
岩をくゞり岩をうち越しさながらに生けるがごとく走る水かな
此所もよしこゝもよしとて立ちどまり足はかどらぬ秋の山みち
壁立てる岩のはさまに落ちぬべくかゝれる紅葉いろぞことなる
しほ原の高嶺おもしろ紅葉照り岩ところゝ松ところゝ

汐の湯にて

下の湯の湯壺にかよふ人しげみ踏みへらしたりこれのきだはし

翌日山越えして小太郎ヶ淵、簀卷の湯など見に行く

汐の湯のうしろの山の檜ばやし朝ふむみちのこゝちよきかな
雲まよふ高嶺おろしに木の葉散るおとのさびしき山かげのみち

山越せば谷みづの音山越せば谷水のおと木の葉散りかふ

歸路

鹽ばらゆ下る裾野のくぬ木はら木末の遠に那須が嶽そびゆ

冬の歌の中に

さむき夜をわびつゝ居れば檜山をあられの過ぐる音の聞ゆる

折にふれて

世の塵を憂しと言ふは塵に染む弱きこゝろを持ってばなりけり
河水のひくきに就きて流るれどなほも淵瀬はのがれざりけり
をりゝに詠み置ける歌はうつりゆくおのが心のかたみなり梟

札幌心聲會創立の折

天地のおのづからなるまごゝろに入りなむ道ぞ言の葉のみち
紀の大人は力をも入れず天地をうごかす道と言はれたりけり
天地のおのづからなるしらべには動かぬものゝあらじとぞ思ふ

建武の功臣有元佐吉一族へ贈位ありし折

御車を都へかへす御先追ひて先づ身を捨てしあはれ益良雄

橘曙覧翁の五十年祭に「遠山松」といふ題にて

蛟なす遠やまの端の松見れば君が鎮めしみたまおもほゆ

○

同七年詠

春の初めの歌

岡の邊の草は萌ゆるを霜ばしらなほいつまでと立ちつくすらむ

朝雉子と云ふ題にて

朝がすみ雨をもよほす山ばたの麥生のすゑにきゝす鳴くなり

埼玉なる蒲生心聲會の創立一周年の祝賀會にものして

中野の我脊たのしからずや淺見の我脊うれしからずや此歌薙

後より來給ふ筈なりし本多大人の遅きに

本多の大人早く來ませや我れにのみ盃の來てくるしかりけり

同じ時(長歌)

言の葉の誠の道は 口にのみ言ふ道ならず 言の葉の誠の道は

心より踏むべき道と 雄心を振り起して 集まれるそこらくの友

田がへしに立てるがまにま 商なひにいそしむまにま 朝夕にう
かぶ思ひを ほにあげてうたひ樂しみ 世の中を樂しき物と 事
毎にいそしむまゝに 心あるそこの人等 よりよりにつどひ加
はり 日に月に數のまさりて 相共にいそしみはげむ 嬉しかる
これの集ひか 樂しかるこれの團居か 斯くてこそ遠き昔の た
まちはふ神の御代より 皇國につたはる道の 言の葉の誠の道の
甲斐は有りけれ

言の葉の誠の道のひらけたる去年の其の日に今日逢へるかも

會後小林なる桃見に行かん筈なりしも祝宴を撤するに忍びず

小林に桃は待つらめど面しろき此の歌むしろはなれかねつも

眞ごゝろのあひあつまれる今日の日の歌の團居の忘らえめやも
人みな心のそこゆ涌きいづるよろこびの聲に滿てる今日かな
兼てしも思ひまうけし今日ながら斯からんと迄は思はざりにき

會の後に

足乳根の教へおかし、言の葉の道のひかりはあらはれにけり
足乳根の親の子として斯くばかり嬉しきことの又とあらめやも
言の葉のまことの道のひらけ行く今日にし逢ひて思ふことなし

夏の川を

川の邊は夏ぞよろしき流れ洲に眞菰うちなびきよしきりの鳴く

埼玉なる蒲生に實詠會を催しける折

さみだれに水あまれ、や水ぐるま繩手の様によせて干したり
何ならぬ車のおとも此所にして聞けばよろしきものにぞ有ける

同じ折(長歌)

懐かしもなつかしの人よ 世の何の思ひもなげに 打ち續く青田
の中に田草とり居り
蒲生なる里の長手を 打群れて先きなるは先きなるどち 後なる
はあとなるどち 中なるは中なるどち かたみに詠ひかはし か
たみに語りあひつゝ なつかしき元荒川を見むとてぞゆく

同じ所の河原曾根と云ふ所にて(長歌)

藻刈舟はるかに見えて 眞菰草はてなく續く 河原曾根曾根の入

江は 行く水の清くま廣く 飛ぶ鳥の影もうつろひ 編おすめは二
つ並びて 浮草の上を胸分け よし五位は眞菰をつたひ 餌あさ
ると小魚取るなり 静かなるこれのながめか 心地よき此所のな
がめか 斯くしつゝながめし居れば うつせみの世の何事も忘ら
れにけり

すみぞめの夕さり來れば打渡す岸になづさふ鰻とり舟

古建築物を見むため伊勢路より奈良に到り宇治京都大津
を過ぎて歸りける旅のほどに

名古屋過ぎ木曾川わたり桑名過ぎ富田濱過ぎて四日市に來ぬ
伊勢の海を見れば遙けし鳴海のうみ見れば遙けし浪おだやかに

伊勢の海ゆ鳴海にかけて眉のごと引けるは知多の出崎なるらむ

四日市より奈良に行く道にて

關の地藏見まくほしけど行く先を急ぎて居れば見ずて過ぎ行く

又 (長歌)

關過ぎて山路にかゝる 伊賀越の八重山あひの 八百あひの加太
のあたり 谷川は清くさやけく 山見れば木立しみさび 大空に
聳えたちたり 越えて行く山の高きか 久方の空のひくきか 其
の峯にたゞよふ雲の 折々に迷ひ下り來て小雨そぼ降る

杉山を麓にひきて天そゝる高嶺なみ立てり加太柘殖のあたり

又

山に添ふ道のあまりに近ければ笠置と呼べど嶺の見えなく

三日の原いづらなるらん我が戀ふる名もなつかしき衣かせ山

奈良に着きて

静かなる奈良の旅寝のたまくらに聞くもよろしき鐘のおとかな

いにしへをしのびし居れば大佛のいます御寺の鐘ひびくなり

○ (長歌)

耳成も畝火の山も 香具山もいまだは見ねど しみさぶる春日の
山を見るが嬉しも

翌日法隆寺へ行く

耳なしも畝火も見えつ香具山も麥生の遠にうすくかすめり

うちわたす麥生の末のあらゝぎや我がこゝろざす御寺なるらむ
いまの世の遠く及ばぬ寺づくり昔のひとに逢ふこゝちする
ひじりなりし厩戸の皇子の尊さを今さらにこそ仰がれにけれ
佛師止利がこめし力のありくくと身にせまり來るこれの御佛
いにしへの奈良の宮古のあたりより見ればよろしも高圓のやま

奈良の市に歸りて

夕日かげ生駒が嶽にかたぶきて奈良の市路も暮れなむとする
生駒嶺を西吹き越ゆる頃にしも秋篠寺を訪ひ見てしがな
築土おほき奈良の市路を牛ぐるま曳き行く見ればそゝろ懐かし

橿原神宮に參拜し久米寺、香具山などをめぐる

大君のたのみ給ひし久米の子は此所に住みしか此所のあたりに
我が欲りし天の香具山畝火やま耳成山を今日ぞあふげる
埴安の池を見がてり香具山の木の根踏み登りい行きなづみつ
香具やまの松の木の間ゆ遠じろく光れる池やはにやすのいけ
かしはでの池のつゝみにのぼり立ち天の香具山あふぎつるかも

○ (長歌)

大君の御笠の山 うち續く高圓山 へそ形の三輪の山邊過ぎ 神
のます畝火のみ山 青菅の耳成山 久方の天の香具山 雲井なす
葛城山も ことごとく仰ぎ見しかど 懐かしき飛鳥の里を見ずて
我が來し

桃山御陵に参拜して

御民我れ大御陵の大まへにたゞにむかひ居りかしこきろかも
なにごとも申すことなし大御世は花咲くごとくいまさかりなり

大津に着き夕かけて三井寺に詣つ

夕ぐれのけしきよろしと詣る來れば折りしもひやく入相のかね
初夜の鐘聞きつゝ眠る三井寺のみまへの宿はよろしきやどり

或る夜杜鵑を聞かむと友と大山公園にもものして

草のうへにかそけき音の聞こゆるは木々の雫の落つるなるらむ
露のおとを心にしめてほとゝぎす待つ此の菴のしづかなるかな

日光へ紅葉見にもものしける時

汽車の中にて

小松原榛の木ばやし小松ばら遙かに見ゆる上野こづのの山

日光町に宿る

谷川のおとを聞きつゝ明日行かむ山路の秋をおもひつゝ寝る

中禪寺へと登る道にて

おのが行く道をつくりてさまざまに磔をくだる石川のみづ
小男鹿の遊びどころと里びとに聞くもなつかし嶺の草やま

中禪寺湖畔にて

入海のなぎさのごともおもへども荒山なかをわけて來にけり

下山の道にて

男體の高嶺雄々しもから松の上にそびゆる男體のやま
かの峯ゆみ山の岨の一つ家と見えにし家はこゝのこの宿
分れては末の落ち合ひ分かれては末の落ち合ひ川のくだり行く

水鳥を

あぢむらの沖邊はるかに歸り行くあかつき寒し浦の蘆はら

道といへることを

世の中に行く道多し然かはあれど眞事の道はたゞの一と筋

あゝる折

思ふことまことの道にたがはずば必ず通るものにぞありける

西歐戦線を（長歌）

ひた引きにひきし引き汐 満つ汐の時の來ぬれや 岸をくづし岩
をもくやし 末つひに山をも吞まむ すすまじき海嘯になりぬ
たのもしきかも

築紫より上り來し高島豊ぬしが訪ひ來つる夜（長歌）

待たれつる君とあひ見て 談り合ふ此夜おもしろ 上つ代の歌の
談に 神語をのせたる書に 八千矛の神にもまみえ 須勢理比賣
沼河比賣にも みかしほ播磨速待 宮人の桑田玖賀媛 影媛に
鮪の臣にも まのあたり相見まつれば 此夜らの更るもわかず
此夜らのくだつも知らず 家つ鳥かけは鳴き さ野つ鳥きゞしは
とよみ 青山にぬえは鳴くとも 面白き此の語りごと 盡くべく

もあらず

又

ぬば玉の夜は更けぬとも談り合ふ此夜は更けず歸りますな吾春

○

同八年詠

春の歌の中に

野邊遠き百鳥の音をはるくくと吹きさそひ來る風ぞのどけき
下めぐむ草も有らむをあづさゆみ春ともわかぬ雪のふりはも

埼玉へものしける折

はるの日の暮れ待ち遠か青ぞらに昇りてうすく月の見ゆなる

庭に薄を植ゑて

庭のおもを萱生にせむと植ゑしかどあまりにしげし梅雨のつゆ

月のよき頃鶴見なる山村ぬしの館にて

釜の湯のおとを聞きつゝむらぎもの心澄ませば澄みとすみ行く

大黒天の繪に

なに事も笑みてむかふる心こそまことに神のこゝろなりけれ

佛御前の嵯峨野の草菴の繪に

おのが名のまこと佛にかへりては世の何ごとも夢と知りけむ

雨後田舎にものでして

草鞋はきて行くべき小田の畔道を足駄はければなづめるもうべ

折にふれて (長歌)

垂乳根の親の心を子知らずと云ふ 然かはあれど 子の心 知れ
らむ親も少なかりけり

戯れに須磨琴の臺を詠める (同)

高麗劔我が蓬生に 垂乳根の形見の琴の 其れの臺二つ有りけり
一つは足ゆるくして その足のゆらくなれど まげ菴の我が
伏菴の 沖つ波うねくなせる 古床の疊のうへの いづくにし
移し据ゑても よろしなべ静まり居れり 一つは足かたくして
足の根にゆるびもあらず そこらくのすきも有らねど 古床の上
に置きては 波なせる疊に添はず 中々にゆらぎくして 足ゆる

きそれに及ばず 然かならばゆるきがよきか 然かならず然かに
はあらず 足ゆるきその一方は いづくにも据りよけれど 村肝
の心の乗りて 其琴を弾き澄ます時 其足のゆるきあまりに 足
の抜け倒れくづるれ 何事も斯くし有りけれ 世の中はすべなき
ものよ 其足の抜けずくづれず 古床の上にも添ひて いづくに
も据りよろしきそれはあらぬか

歐洲大戰の媾和會議開かる (長歌)

現身の此世の中に 生れ出で、人とあるもの 戦ひを好むはあら
ず 然れども國を建つれば しが國の興るを願ひ しが國を興さ
む爲めは 人として踏むべき道を ともすれば踏みたがへつ、

ゆゝしかる騒ぎを起し 世を亂り人を損ひ 世の中を暗きに誘ふ
あなあはれこの世の中は はかなくも術なき物よ 何時の代か
何時のときにか 斯かる事あとなく絶えて 世に生れしよろづの
人の 隔なく皆兄弟とむつび合ふらむ

○ (長歌)

世の中に國を立つれば しが國の興る願ふは 民として願ふべき
事 斯くありて始めて人ぞ 然かはある然かはあるども 己が國
を興さむ爲めに よその國の興るを妬み 事かまへ挫きいためて
己れのみ立たむとするは 天地の道にそむけり 世の中に國を
建つるもの 真心に立ちかへり來て 天地の正路を踏み 人の道

をまさしく踏みて そこらくも他を妬まず そこらくもよそを痛
めず よそを思ひ世を思ふ時 現身の此の世の中に 美しき光り
さし來て 世に生れしよろづの人の 隔なく皆兄弟と睦び合ひぬ
べし

○ (同)

世の中の人の心を 正しきに引き返すべき 大きな力を持てる
國民の此世の中に まさしくも現はれ來むは蓋し何時ぞも

○

世の中を動かすちから大きな國のちからを我れに得てしが

○

しばらくも道をはなれず身を修めたゆみあらざれすめら國民

○ (長歌)

萬づ人その身を脩め 萬づ家皆をさまりて 萬づ事道にたがはず
ば おのづから輝き來むぞ國の光りは

○ (同)

直くして力の強く 聴くして道にたがはぬ 村肝の心を持たば
若草の芽張る春野に かぎろひの燃ゆが如くも榮え行かむ鴨

○ (同)

皇國の千萬の人 鹿子じもの一つ心に 身を修め心を脩め 人の
道みづから踏みて 春霞匂ふ心に 人の道を世に説かむには 天

の下廣しと言へど よろづ國多しといへど などてかは動かざる
べき 身に踏みて行ふ道は神も受くべし

白耳義王アルバート陛下戰勝軍を率ゐて首都プツラセル
に、歸還ある由承りて (同)

目に餘る敵も何ぞは 人の踏む正しき道は 暫らくも踏みたがへ
じと 振ひたつ大御たからを みづからあどもひ給ひ 假宮の
殿にもい寝ず 戦ひの荒ぶる場の ひた土のいぶせき上に いた
はしく明し暮し、 白耳義のしが大君の 今日はしも敵を破らひ
九重のもとの都に 歸ります其日なりけり 五年の長き年月 苦
しみし彼の人鬼の 敵の手のせめぎを離れ 大君を迎ふる御民

世をおぼし御民思はず 真心の験し顯はえ 鬼なせる敵追ひしぞ
け 今日しもぞもとの都に 御實を見そなはず君 そを思ひそれ
を思へば 外國の民なる我も涙しこぼる

○ (同)

現つ神吾が大君の 知し召す我が日の本に 傳はれる言の葉の道
は うつし世の人の心の もろくの罪けがれを拂ひ よこしま
なる心惑へる心を去り 神の子の末なるものを 真心にかへさむ
爲めと 遠き世ゆ傳はり來つる 玉ちはふ神代ながらの 道にし
ありけり

○

伊豆の伊東へ行きける時

足柄の八重やまあひの谷がはに川菜摘むなり山少女ども

出湯わく伊豆の田中のかみ嶋のうしろの山はくすしきみやま

伊東にて

波の音も聞えずなりし夕なぎの沖にねぶれりはしき初しま
ゆたかなる朝満つ汐のなみの音を寝ざめしづけき枕にぞ聞く

歸るさ

大なぎのにはよき海を朝びらき乗りいづるこゝち何にたとへむ
この夏はまたも來なむむ浦ぐはし伊東よさらば幸くあらなむ
宇佐美過ぎ網代も過ぎぬ彼の見ゆるいで崎の遠は熱海なるらし

○ (長歌)

波の上に浮ぶ初鳥 伊東に見字佐美にても見つ 網代にても熱海
にても見しが いづ方の浦より見ても 其浦のものなる如く 其
浦の沖に浮べりはしき初鳥

再度伊東へ行く

茅が崎は松のよき所松ばらの八重かさなれり砂はらつゞき
眞鶴の出崎の沖の大岩に白木綿かけて波の寄る見ゆ
眞鶴が崎遠ざかりゆけば行くてより近より來たる愛しき初鳥

伊東にて

岡のうへの物見の松のあたりより玖須美松川見さけつゝ行く

眉ひける高麗寺やまの山つゞき島とも見ゆる夕ぐれの海

○

同九年詠

新年思ふ心を述ぶる歌 (長歌)

荒玉の年の光りは 東のうみの鎮めと ありたゝす皇御國に 先
づぞかゞやく 畏しやいや年のはに先づぞかゞやく

春の歌の中に

霜覆ひ除きてやるぞ冬ごもり永くせさせついでせかりつらめ
うち霞む野の邊のつくし摘みあきて草をしとねにうまいして梟
草の戸はもの靜かにも夜の更けて有るかなきかに月ぞかすめる

伊豆の伊東にいます本多大人竝に高島君へ

若くさを裾野にひける久かたの天城のやまの見らくこひしも
このごろは小雨そほ降り久かたの天城の山の見えずかもあらむ
横磯のいその白浪折りかへし見むとおもひしに二年を経ぬ

埼玉の野外會にて詠める中に

野づかさに所さだめし歌むしろさすがに春の満ちたらひぬる
す々菜ばた分け來る人におどろきてき々すはたてど遠く離れず

箱根の湯本にて

若葉さしみどりしづけき山の湯に雨聞き居れば物おもひもなし

暮秋の歌

つくづくと果なき空をながむるも更けゆく秋のこゝろなりけり

望の夜鶴見の岡なる山村邸にて一弦琴の會を催しける折 (龍鳳歌)

久方の月にたむくる琴の音さやく 秋風の吹き來るなべにその
音さやく

朝の霜を

日ならべて寒さまされば霜ばしら踏みくづす音を朝な朝な聞く

歳の市にて

ならべたる植木の市の鉢の木の春待つ枝のいつくしきかな

日ねもす雪の降りける日

雪に明け雪に暮れ行く山ざとのしづけさしのぶ今日にも有かな

曉の雲を

いづ方に行くとしもなく曉のそらに浮べる雲ぞしづけき

山村ぬしより手作りの蠅打と塵拂を給はりければ (長歌)

蠅打てば打ちもそらさず 文机の塵を拂へば 心まですがくし
もよ 給はりしこれの二つの 君が手になりつる思へば 事そぎ
ていとみやびなる さすだけの君の好みのいともゆかしも

木山遷ぬしより「開け行く世にはあれども敷島のまこと

の道はふるはざりけり」とあるに

たふとかる誠の道は昔より世に入れられぬものにし有けり
世の中にふるはぬもよし真ごゝろの道の絶えぬを願ふなりけり

又同ぬしより「容れられぬ物にしありとも捨ておかば誠
の道の絶えやしなまし」とありければ

真心の道はそこらく知れゝども思ひのまゝに説くいとまなき
一人して説くも甲斐薄し世の爲めに心あらむ人はたすけ給へや
世の爲めに盡す五十人百人こゝろあはさむ友をこそ待て

行路の歌

我れ先とあらそふからに踏みくづし行くにゆかれぬ道と成にけり
むら肝の心いそがず踏みならし良き道かため進むべらなり

又

くえかゝる岨のかけ道霜にいて上りくだりのむつかしの世や

足もとに心とられて後先を見るいとまなきぬかるみの道
良き道も尋ねなば有らむ行く先をいそがば廻れ道なからめや

時事偶感

もとよりも曲りまがれる曲り木の枝はたむとも甲斐なからまし
曲り木は術なけれども素直なる芽をしふかさばふかざらめやは
それが根によく土かひてすなほなる芽をしふかさむ人の無き哉
すなほなる芽をしふかさば永久にためむ手数はかゝらざらむを

又 (長歌)

空見れば疾風吹きまき雲ぞ亂る、雲は疾風の誘ふと云ひ 疾風
は雲の起すと言ふ 世の中は斯くこそ有けれむつかしきもの

議政壇上の原首相を

十重廿重寄る大波をせかむとす兎にもかくにも強き人かな

普選案上程日の帝國議會

あら磯にわれてくだくる大浪のおとのはげしき今日にも有かな

米國加州民の暴狀を

かたはらに人なきさまのふるまひも世を思へばぞ堪へ忍ぶなる
ゆづるだけゆづり盡してゆづられぬはてを知らずや亞米利加奴
過ぎし年支那打きため露西亞人を打ち懲し、は何のはてと思ふ
ゆづるだけゆづりしはてを知らずして國を廣むるでだてとは何
燃え立たむ思ひをおさへ堪へ忍ぶ我が國民のこゝろ知らずや

ニコラエフスキの慘事を

西比利亞は鬼の棲む所いまも世におそろしき鬼は棲めるなり鬼
獸すら飢ゑずば友を食まざるにいかなるものゝつどひなるらむ

國際聯盟の爭議を

己が田へ水引く田子のあらそひの絶えぬ終りや如何になるらむ
人ごとを妬みうらやみ世の中を暗きに誘ふあさましの世や
戦ひの疵をいやさむそれまでのてだてとあらば言ふ言葉なし
敵のまへに立ちし四年のまじはり世を救ひ得る力なりしを
頼みなきものを頼まず我が力おのれ鍛へて世には立つべき

明治神宮鎮座祭

天なるや先つみかどの天降らして鎮まりまさむ今日ぞかしこき
大神の永久の宮居の新宮の代々木の宮居たふときろかも
國たみの心のそこを引きしむる神の御稜威をあふぎつるかも
青山の宮路うづめて高潮の寄せ來るごとく人のまゐ來る
大浪の寄せ來るごとくよせ來れど今日にしあればさすが静けし
限りなく宮路うづむる人浪にすめらみくくの榮えをぞおもふ

○

同十年詠

春の霜を

山縣の春のさむさを思はする今朝のあさけの霜の降りはも

月見草を

水きよき夏の夕べの川原みち月待ちて咲く花のすゞしき

夜將長と云ふ題にて

宵々に蟲の音澄みてあきの夜のながきなが夜はちかづきにけり

碓氷の紅葉を見にまかりける折本庄のあたりにて

大空をおなじかたちの雲あまたつらなり行きて日かげ長閑けし

同じ折星の湯にて

山の湯に夕さり來れば谷かぜの枯生なびかしそゞろさむしも

焼石のところくくしまろびたる萱野をおろす風ぞさむけき

冬の歌の中に

たきゞにと庭の椎しば切りおろし山ざとしのぶ冬ぞよろしき
明けぐれの暗さも分かぬ霜のいろにいよくさむき冬がれの庭
鴨のつく野末の沼のはるくとか青に見ゆるながめさむしも
冬ながら日かげかすみて脊戸山の檜のかれ葉のおとだにもせぬ

高島ぬしのいたづきにて伊東にて作らせたる楠の机を送り來りける時

それが名を玖須美とおはせぬ永久に伊豆の玖須美を忘れぬが爲

淺間の煙

大正九年の暮に淺間山の爆發頻りなり、十年一月二日その有様を見む
と同志二三を催して行く

雄たけびに荒ぶるみ山淺間嶺は心ゆく山雄々しきみやま

そらを焼く峯のほを仰がむと寒き夜ごめにみやこをぞ立つ
浅間へとむかふ夜汽車に若人のオーバスターの見の勇ましき
若人のみづくしきが打ちつどひ話すはなしは諏訪か浅間か
赤倉と折々言ふは此の人等スキーのむれかさても雄々しも
四日目に噴くといふなる浅間山明日は八日目たのみあるかも
大地震のふるはゞふるへ石の雨火の雨降らば行きしかひあり
こゝろざす浅間のすその沓掛の雪のふかさをおもひつゝ寝る
夢のうちに走るくるまの時たちて熊野だひらと呼ぶもうれしき

午前三時沓掛驛に下車す、空は雪氣の雲にとざれけん星一つ見えず、
あたりに遮るものなき村はづれ迄行き見つれ共、山は裾野だに見えず、
道は雪消道の氷りたるが岩の如く又鏡の如し、皆新雪の上を行く、氣

温は〇度下十度内外なるべし

世のなかにかゝはりうすき驛とて下りたつ人の一人だになき
岩のごと道は氷れどその寒さ身にはおぼえずあかつきの道
沓かけのそがひに見ゆる離山たゞ其れのみぞ夜目に見えける
あかつきの光りやうくる離山木だち白けて見ゆるなりけり
沓かけに忘れぬものゝ一つなる小川の車いまもめぐれり
雪みちははや明けたりと見ゆれども夜ぶかきさまに眠る家むら
小浅間の見えしのみにてさしぐしの曉ぐもは別るともなし

停車場に引き返して一睡し曉を待ちしが目覺めて窓外を見るに真近き
空の雲間に雲にはあらで真白きものゝ光れるあり、之れ浅間の嶺が曉

雲の中に其靈姿を現はし居れるなり、煙はと見れば残念にも最早活動を止めたりと見え平日の二三倍位なるが山背に群がれり

曉の雲のひかると見るがうちに嶺のすがたはあらはれにけり
あかつきの雲間に見えし東の間の高嶺の雪のひかりをぞおもふ

とかうするうち夜全く明ぬれば旅館を呼び起し温かき物など命じて山の話を開く、山は昨年暮廿六日を終にて大活動を止めたりと、爆發の長かりし時は六分位なりし由なり、峯の茶屋の邊に落ちたる物なりと云ふ軽石を見るに大なるは徑一尺五寸に餘れり、足の仕度も不十分なれば山頂迄は覺束なし、登り得る所迄登らむと宿を立ち出づ、千ヶ瀬を過ぎたるあたりに一軒の茅屋あり未だ戸を開かず、

軒つたふ煙を見れば住むひとのありとも見ゆるす々のやぶれ家
かへり見る甲斐の境の五百重山我れ高くなれば彼れ高く成る

沓かけのあたりの野邊はいつの間か谷そこごと低くなりぬる
木花咲く唐松林もみばやし枯木林の雲につゞける(木花は霧の水
りたるもの)
から松のはやしの間よりあふぎ見る高嶺のゆきのひかり爽けし
大森の大人が來まし、小諸ゆの山みちならし谷のそこに見ゆ
沓かけゆ草津へ越ゆる山みちの花田たむけにまたも來にけり

一時半頃峯ノ茶屋に着きぬれど此所は第二回の噴火の時焼けて只廻の石垣を残せるのみなり、山頂は此所より左に別れて登るなり、此所は上信の國境なれば北東には吾妻川流域一體の低地を隔て、越後境の三國山脈の連互せるあり、東の方は遠く日光山塊に續く會津の山は満山雪に包まれて斷雲の間に光れり、南は甲斐の連山に打續き立科山の出鼻の彼方に雪をいたゞき通れるは木曾山脈なるべし、飛騨の連山は淺間に隠れて見えす、總て南方の山を東北の山に比ぶれば雪の多少に大なる差の有りて其の色を異にするも亦一つの味ひなり、

過ぎし夏あろりかこみていこへりし篠家は見えす黒き焼原
ほのくくと雲につらなり眞白にも雪にこもれり越のむらやま
心あての方はたがひて右方に草津白根のけぶりをぞ見る
會津嶺のたかさ知られて遠じろき雪のひかりを雲井にぞ見る
甲斐信濃飛驒のさかひのむら山はおもひしよりも雪のすくなき
立科の出ばなを越して春のごとかすむや諏訪のあたりなるらむ

暫時休みて森林に分け入る、雪は一尺ばかりなり、噴火の爲めに打落
されたる木の枝驚くばかりなり、所々草木の焼けたる所もあり、森林
を出づれば淺間の雄姿は全山雪の装ひして雲表に聳えたり、噴煙は烈
風の爲めに山背に渦巻き遠く上毛の空に離くさま雄大と神秘とを合せ
たり。

から松の大木のもとに臀かけて嶺のけぶりをかしこまり見る

いたゞきの雪打ち消ちてうづまけるいぶきのけぶり畏こかり鳥
雪のなかにうづくまり居て仰ぎ見る高嶺の煙忘る日あらめや

行者返しと云ふ所迄行きたれど下山の時刻も心にかゝれば思ひはなし
て此所より下山す、杓掛に歸り着きし頃西風に粉雪を交へて來り全く
寒國の夕暮のさまを味ふを得たり。

粉雪降り暮れなむとする杓かけのふるき驛の火かけさびしも

春の磯回

相州葉山に在らるゝ岡三保子刀自が一日實詠會を催さばやとあるに折
よく播磨より中野隆子の刀自も上り居給へれば例のすぐさぬどちの誰
彼打ちつどひて行くことにしたるが己れは中野、柳下、中西の刀自達
と同行せむと新橋の驛に行く、驛には柳下、中野の兩刀自己に來居給
ひつれど互ひに未だ知らぬどちなれば程近く居給へどさりげなきさま
なるもをかし。

互にも面わ知らねば友乍ら相知らずあり中野の刀自柳下の刀自

遅れ給へる中西の刀自を残して車に乗る。

我が友の一人二人は此の汽車に在らむと思へどせむすべの無き
つゞきたる車のなかの二つ三つ行きかへり見れど友のあらなく

横濱驛にて山村ぬし来る、逗子驛に下り、谷田、大谷の兩氏に逢ひ葉

山へと行く、先づ岡刀自を訪ひ兼てまうけ給へる所に行き濱つたひし

て三度所をさへ替へて歌の塵を開く、中西の刀自、照子も来る。

砂はまに網干す翁ほすあみをつくろひながら春日くらせり

世のなかのなにも思はず濱千鳥斯くてのどく日を暮さばや

大谷ぬしが「真砂路は歩みにくしと杵をぬき傘に貫ぬき肩にかけたなり」

と詠ひ給ふに

砂はまを足袋にて行けば行きよきを大谷のきみは笑ひて居ます

岡刀自が「あやにくに霞ぞかゝる富士の雪吾が物にして見せまし物を」

とあるに

あやにくに霞ぞかゝる然かはあれど中々春のながめ長閑けし

又

磯の家に足ふみのべてのどくと波のおと聞く今日のよろしき
箱根やま見ゆべく見えてさだかにも見えぬや春のならひなる覽
浪のおと鶉の鳴くこゑ桃の花今日の一日をながかれとこそ
和布刈舟かへるが見えて打ち寄する波もおとなき春のゆふなぎ
濱びさしめぐる河蜷こづなの歌むしろ春日のどけきあそびなりけり

長き春日も夕暮近くなりぬるに猶飽かぬあまり、山村ぬしは今より三崎へ行かむはいかにと云ふにそはよからんと夕かけて行く、

三崎へと心ひかれてすべもなく別れも行くか友の四人に

自動車の来るまで歩かむと山村主が行くに己れも伴ふ、雨少し降り出でたり、山村主を見て戯れに

おほさいやく／＼喜びありや袖笠をかざしてを行く山村のあせ

自動車来り人々と共に乗り夜に入りて三崎に着く

磯の波おとなく更けて港江にうつる火かげのしづかなるかな

この港奥まりたれやさゝ波のおとも聞こえず夜半ぞしづけき

小夜更けて風やかはれるより／＼に寄る波の音ぞ聞え來にける

行く雲のはやさ知られて天つ星夜ぶかきそらに見えがくれする
雨にもやならむとすらむ夜の物すべして寝れどむしあつきかな

明るあした

城が島沖をふたぎてさながらに内海なせり三崎みなとは

歸途油壺を見むと山村ぬしと照子と我等三人徒歩にて近道をとる

岡越えに下りし來ればうつくしく椿はな咲けり谷あひのむら

行く／＼右手の方を見るに樹間に帆柱の隠顯する所あり

右手ふかく入れる入海木の間ゆも帆ばしら見ゆれ網代みなとか
この岸に家は在らめど泊りぶねむやへるのみが木の間ゆも見ゆ
岡の上ゆ見おろす海のたひらかに木立さびたりしづけきみなと

やがて又左手の樹間に湖水の如く静寂にしてや、凄愴の感ある所あり

こと問はむ人はなけれど油壺まさしく是れよみづらみのごとき

臨海試験場に至り何くれ參觀し出で、小網代城趾に登る、三浦道寸の墓は其後なる出鼻にあり。

さねさし相模の海をせなにしてしづかにねぶる三浦道寸

網代より船して葉山へ歸らん心がまへなりしが天氣悪しければ出でずと云ふにやむなく陸路をとり車の通ふ林といふ所へ出でむと行くに雨降り出で烈風をさへ加へたり。

雨にぬれ風にもまれて行く思へば我が身ながらもあはれなり梟

漸く林と云ふ所に出で馬車にて葉山に向ふ、今日の荒天にては馬車にて大崩を越さん事は危しと云ひ居しがやがて其所に來りて馬車を止む。

海ばたは只眞白にて波のおと風のひゞきの外なかりけり

危しと馬子が恐るゝ海ぎはの大崩れにぞちかづきにける

かゝる日に馬車を遣りなば必ずも吹き落されむ降りよとぞ言ふ
すべをなみ馬車乗り捨てゝ風を負ひすくみて越ゆる大くづれ道
あゝと云ふ聲におどろき見かへればあなゝあなや山村の我脊

○ (長歌)

山村のあせ起きなほり得ず 援けむと我は思へど 救はむと我は
思へど 高麗つるぎ我が踏みどさへ定まらずけり

はう／＼の體にて岡刀目の御宿に着きたるが風雨益々烈し、宿り給へとせちに勧められたれど家には幼きものゝみ残しあればと照子が心もとなれば、山村ぬしを残して強ひて歸路に就きしが風雨のため自動車も出でず行路の困難言語に絶す、傘をたゝみ裾をまくり、風のひまを計りて突進して漸く停車場に到れば電燈は消え場内暗澹只風雨の怒

號するのみ、幸にして汽車の不通に逢はざりしがまだしもなりき。

長閑かなる土佐の繪巻と苦しかる鳥羽繪の巻をかさねても見し

東宮殿下歐洲より御歸朝の日に

海の外の八重たな雲を踏みあたし日嗣の皇子はかへらせたまふ
例無きみ旅を終へて還ります皇子のみけしきいとまたふとき
晴れやかにいますすがうちに動きなき稜威の光りぞ輝きにける
斯くてこそ豊あし原は千代八千代動かざりけれかしこし大皇子

原首相の凶報に接して

我が國の行くべき道のたゞならぬ此の時にして何のしれもの
さらぬだに人のすくなき我が國にいかなる者のおもひゝがめぞ

世の中の多くを知らぬ若ものゝ思ひはやりぞすべなかりける
すなほにも生ひ立ちかねて世をひがみ身を苦しめし輩ならまし

折からワシントン會議の折なりければ

たまきはる命にかけて大君の遠の御使こゝろみだるな

本多晋先生長逝せらる

我がまゝもとがめ給はず子のごとく見させし大人に別れぬる哉
蔭ひろき老木の松の枯れしより霜のさむさを知る小草かな

故大人の喜壽の御祝の折、在京會員打集ひ陶器の手あぶりにおのおの

祝の歌書き其を焼き付けて紀念としてさゝげし事など思ひて、

君の爲め心をこめし彼の火鉢たゞ一と冬のいのちなりしか

元旦房州白濱にて (長歌)

宿の前に沖を岩にて限れる小さき舟がよりあり、大小の舟二三あり、
(此歌、折から財界の動搖甚しかりければ其れが心に作用したるが如し)

和田の原寄せ来る波の 暫くも止む時なければ 小舟は波のうね
うね 大船も波のうねく 暫くも止む時の無し 世の中は斯く
こそ有りけれ いにしへゆ今に至るまで 今ゆ後限りも知らず
其波の來寄する如く 世の中は揺れにゆれつゝ止む時なからむ

次の日

嶋つ鳥鷯の居る岩に寄る波のほのくしくろく夜の明けむとす

おほ海のはてなき波を照らしつゝゆたのたゆたに昇る日のかげ

○ (長歌)

昨日見し沖の岩根に 打ち寄する大波小波 今日も亦日ねもす寄
れり 明日もまた斯くしあるらし 嶋つ鳥鷯と云ふ鳥は 其岩に
來る日來居ぬ日 その日その日ありと云へども 岩が根に來寄す
る波は 天地の盡きざる限り 寄りに寄り寄りによりつゝ 絶ゆ
る時あらじ

野嶋が崎へ行きて

野島の崎のさきなる磯馴松岩に生ひ伏し幾代經ぬらむ

其の歸るさ美しき空貝あまた拾ひたりしが妻と娘とを伴
ひ居ければ

彼の琴に此貝を付け其れが名を野鳥と負はさばいとよけむかも

初春のある日

坂道を行きかふ人の木の間にひにかすむけはひに見ゆる今朝かな

播磨なる中野の刀自より「去年の今日我を葉山へ伴ひし

君を思へば戀しかりけり」笹村の大人を思へば長閑な

る葉山の景色浮ひ出で来る」などありければ

春はゆき春はきたれど三日夕播磨のきみをいつとか待たむ

夏のある夜

更けゆけばひるのあつさも忘られて草に露置き月も出でにけり

那須の山土産

紅葉のしほはやゝ過ぎざまなりしかど、然すがに悪しからず、北温泉

に一泊し翌日絶頂をきはめ、夕暮雨に逢ひ湯本に一泊して歸りぬ、

たゝなはる鹽原つゞき那須やまの裾野の紅葉いまさかりなり
秋ふかき那須の高嶺はもみぢ葉の赤裳すそ引き天そゝり立つ

北温泉にて

子どもさび風の吹き入るゝ紅葉を湯ぶねの中に浮かせてぞ見る
ほの暗き行燈のもとに腹ばひて旅の歌かくやどりよろしも
人も無き大湯にいりてあかつきの星の光りをあふぎ見るかな
あかつきの星かげおほふ湯のけぶり忘れぬものゝ一つとぞ見る

大丸温泉にて

おもしろき山の湯めぐり秋ふかき時雨の雲は雨となりにけり

絶頂にて

天そゝる岩根ふみしめ那須が嶺に雲とゝにもものほりぬるかな
雨を突きのほりて見れば背面なる會津の方は雲の海原
ふもとより絶えず巻き來る雲の間にむらゝ見ゆる岩代の山

冬の歌の中に

吹きおろす谷間の風の夜もすがら木の葉をさそふ音ぞわびしき
あぢ鴨のむれて立ち行く港江の入りがたの月のかげのさむけさ
苔清水こぼる岩間の山すげのふかきみどりは見るもさむけし
鳥かげに來寄る小鴨のかず増して冬のふかさも見ゆる海かな

歳の暮に

おもふ事ならぬもうべな手近なる事に追はれて今年も暮れぬ

立野と云ふ所にて埼玉心聲會を開きける時其の行く道にて

掛けて干すはでの晩稻のつらゝに日かけ長閑けき埼玉の野邊
ひづち田の若芽は青くなびけども冬にしあればさびしかりけり
冬の日の立野の野邊に居る雁のねぶれるさまの長閑かなるかな

英國皇太子殿下の我國に渡らせ給ひしを迎へまつりて (長歌)

日の出る國の皇子 日の入らぬ國の皇子を迎へ給ひて 相共に御
座に立たす あはれ畏こきかも 御よはひも似かよひませば 御
心も似かよひまさむ 畏けど我が大皇子も 良き友を持たせ給ひ
ぬ 此の皇子がおのもゝくに 御位につかせ給ひて 相共に倚ら
し玉ひ 相共に援け給ひて 世の中をい照らし給はゞ 國といふ
國の大君 人の世の上なき君と 世の人の人のことごと 懐かし

み睦び寄り來む あはれ畏こきかも 日の出づる國の皇太子 日
の入らぬ國の皇太子

華府會議の始まれる頃

我が國のまこと心をかざりなく世に知らすべき時は來にけり
つゝましくするも良けれどひが心持つが如くにあやまたれなむ
なに事も思ふがまゝに言はむ方かへりて人は聞くべかりけり
この時に言ひ知らさずば我が國の心は永久にあやまたるべし

伊豆に在る高島ぬしが病あつしと聞きて訪ひ行く (船中)

かれを思ひこれをおもひて寝らえぬに枕をゆする浪のおと高し
伊豆の山見えもやすると出で、見れど未だ夜ぶかく海ばら暗し

病みつゝも在らば在られむさすだけの君の病のよし癒えずとも

枕頭にて

思ひのこす事の一つもあらずとて嬉しむ見るが堪へがたきかな
いとせめて世にある間しばらくもたゞ安らかにあれよとぞ祈る
君がこゝろさびしからむと歌がたり談りはすれどまうら悲しも
我が思ひ歌にしなれど悲しくて君に聞こえむ歌にはあらず
やすらかに君がねぶれる其ひまに浮びし歌を書きしるし置く
こゝろ行く那珂川の歌を書き留めて我れに贈らむ心なるらむ
我が思ひうたひあげつゝ君が思ひうたふを聞かむ時は來ざるか
やすらけき君がこゝろを亂さんと思ひあまりし事も得言はず

道のこと思ふなかばも爲し終へてつひには君に別るべらなる
あまりにも君いそぐなと道の上に君をとめしは我れのあやまち
我が友の靈のこもれる歌ぶくろ手むだき持ちて歸るさびしさ

○

同十二年詠

知れる人の主宰せる歌誌の新年號に（長歌）

年は去り年は來 時は去り時は來 物替り世は移れども 人の踏
む誠の道は 萬代も變る事なし いざ行かな我れも踏まむ 其の
大道誠の道敷島の道

春の雪降りける折

雪は降れど風のなければなかくに寒くしもあらず夕ぐれの宿

四十五

登 朝

雪のうへに陽炎燃えて春の日の日かけ長閑けきかげともの庭
雪こほり上はどけしたる田舎道日かげによりてぬかるなりけり

又 の 日

雪消の氣空にのぼれや今日もまたひるにしなければ曇り來にけり

春 風 を

春の雨のなごりに萌ゆる草のはらをりくわたる風の長閑けさ

初夏遊山と云ふ題にて

夕かけて山ほとゝぎす鳴くと言へば上なきつとぞ聞きて歸らむ

冬の歌の中に

小鳥すらおもふ方には飛びも得て枯生にこもる野風さむしも

旅行の歌の中に

心急ぐ旅にしあらねば山合にそほ降る雨をよろしとぞ見る

伊勢詣

二月末つ方さる由ありて俄に伊勢詣にと出で立つ、四日市の邊にて

さして行くゆくてにかすむ遠山や鳥羽のあたりのみ山なるらむ

阿漕あたりにて

鳥羽と見し山は右てにすさり行きて更に低くも鳥羽山見ゆれ

宮川を渡る

宮川と聞けばなつかし大神のしかす山田もほどなかるらむ
砂しろく水か青なる宮川のながれさやけし神のますところ

内宮に詣つ

何ごとを思ふともなく畏こさに伏してぞ拜む神の御稜威を

神路やま神のみやがきことそぎて神代をたゞにおもほゆるかも
木立しみさびたる上に上もなくすがくしきは神ながらならし

参拜事なく終りぬ、よき折なれば二見の浦をも見て歸らんと行く

二並ぶこれの岩ほははしけやしいつの世よりの妹脊なるらむ
妹と呼び脊とかしづかれ浪の上にうごく世知らず立てる岩かな

其日歸らむと思ひつれ共鳥羽の港を見ざらむも心残るわざなれば今宵
は其所に宿らむと夕かけて行く、日もまだ暮れねば日和山に登る、

並びたる坂出菅島しら崎の沖に見ゆるは伊良古なるらし

伊勢のうみと外つ大海のまなかひに浮びて見ゆる伊良古の出崎
坂出しま沖の神じま伊良古崎知多の出さきも島とこそ見ゆれ

日暮れなんとすれば山を下り海岸の對山館と云ふに宿る

夕なぎのかすむけはひに打ちわたす島のさきく遠ざかり行く
島々の暮れゆく見つゝたゞ一人友を思ふがさびしかりけり

あくるあした

静かなる朝いの床を起きいでゝかすめる海を見るがよろしさ

樋の山と云ふは日和山よりも高しと聞けば眺望一しほ良からむと行く、

髪かたち似かよふからや逢ふ女みな似かよへり所がらかも

樋の山にのぼりて見れば海越しの伊良古が崎は今日もかすめり

鳥羽のうみを朝びらきして行く船は熊野の浦をめぐり行く船

外うみもかすみきらへり内海の尾張のうみも霞きらへり

春のうみのかすめる空にほのくゝと浮嶋なせり知多の出さきは

我が戀ふる大王が崎は見えねども知多の出ばなの師崎見ゆれ

今日は船して三河の蒲郡へ渡らむ心がまへなれば午頃山より下るに今

朝の霞はいつしか消えて北風頃に吹きつり雪をも誘はむ景色になり

ぬ

鳥羽の浦ゆ船乗りせむと我が待てば春風いたく荒れむとぞする

出帆は午後一時と云ふに一時半を過くれど船来らず、烈風のためなる

べしと云ふ、二時を過ぐる頃船漸く来る、乗客は己れを加へて僅に三

人なり、船桃取島を離るれば浪の高き事驚くばかりなり、折々スケル

一の空轉する音を聞く浪の甲板を洗ふは勿論なり

北かぜのすさび殊なる大戸あひ船は山行くこゝちこそすれ

雲表紀行 (飛信東側山脈縦走)

所謂日本アルプスの縦走に行く事になりて若き人等二人と七月十四日
上野驛を立つ、信越線を通り松本に到り大町線にて有明驛に下車中房
温泉に一泊翌日燕嶽に登り雨にはまれ燕小舎に二泊し大天井嶽東天
井横通嶽等を経て常念嶽に至り風雨のため鎗が嶽の登攀を断念して下
山す。中房温泉にて

山あひの夜は雲ふかきならはしとおもひ知れども心は晴れず

翌日燕嶽に登る

明日行かむ尾根のつゞきを仰ぎつゝはるけく登るつばくろが嶽
はるけくも仰ぎし雪をいつの間か下に見るまで登り來にけり
友の呼ぶ聲におどろき見さくれば尾根を打ち越し鎗が嶽そびゆ

空はよく晴たり、燕小舎に登り着きて初めて見る飛信大山脈の壯大な
る絶景、之れ眞に登山の苦楚を嘗めたる者にのみ與へらるゝ大自然の
賜なり、左方遙かに聳ゆる鎗が嶽を盟主として双六、蓮華、鷲羽、野
口五郎、三ツ嶽、烏帽子、不動、蓮華、此所に至りて針ノ木峠を經、
白馬、大蓮華に連る此大連峯は皆九千尺より一萬尺に近き峻峯にして、
今我等が行かむとする東側山脈と並行し彼我の間隔近きは二里遠きは
二里半位にして南北七八里に連亘す、此谷を高瀬入と云ふ

一とつらに壁たちつゞく高嶺尾根越のくにまでつゞくなりけり
天つ嶺肩をならべて我が方を壓するが如く對ひて立てり
天地のかみのちからのおそろしき限りを見するこれの山なみ

○ (長歌)

高瀬入の谷物凄き 打ち越しに尾根を連ねて 天そゝり壁立ち續
く 山なみの巖かしきかも 南のみ空を突きて 雲の間に立てる

高嶺は一名に負ふ鎗の大嶽 西鎌の其の尾根つゞき 双六の高嶺
そり立ち そが肩に笠ヶ嶺見ゆれ 蓮華嶽鷲羽黒嶽 續けるは野
口五郎よ 赤牛は五郎の脊なに 蹲まり眠りてあり覺 三ツ嶽烏
帽子が嶽と やゝく に低まるあたり 雪田を空に光らし 山並
の北のとぢめと 嚴めしく立山たてり 立續くこれの山並 人の
世の境ともなく 人の世のものとなけれど 我が立ちて見さくる
思へば 人の世のものにし在りけり 畏きや神の手業 斯くばか
り大けきものぞ 其所思へば これの大谷 こゝもへばその山
並 現身の人の世ながら神の庭ならし

○ (同)

大空を貫ぬき立てる 鎗が嶺の北鎌尾根の 東ゆ流れて下る 久
方の天上澤 其西の雪のたぎちを 下し來る千丈澤 かゝ鳴くや
鷲羽の嶽の 岩間より流れて下る 湯の俣の溪を合せて 下り行
く高瀬の谷は 道すらも絶えてあらねば 未だにも人の至らず
永久の雪のたぎちの 大岩をひたし流るれ 神代より今に至る迄
今ゆ後限りも知らず 雪はも解くれば降り 降り積めば又解け
初めて 現身の人のすさめぬ 大谷の渦巻く水は 天地の續かむ
限り流れてやまじ

燕嶽の頂にて

神代より降りおける雪を踏みしだき登る高嶽の道ぞかしこき

つばくらのひたをの岩の岩かけに吹く風よぎてしばしまどろむ

此日燕小屋に宿る、夕刻より斷雲は密雲と變し夜に入れば咫尺を辨せず

世の中を遠くはなれし大嶽の八重雲のうへにいほりするかも

翌日も夜來の雨やまず終に此所に二泊す

つばくらの高嶺の小屋に雲を卷く雨の音聞きて二夜あかしぬ
忘れ得ぬ一つにならんつばくらの高嶺薊のこれの味噌汁

雨晴るべくもなければ惜しけれど下山せむとす

只一日ながめしのみをなごりにて今はむなしく下るべらなる
山の上のいかしながめは夢にしていづくを見てもたゞ雲の海
せめてもと心なぐさにながむれどいづくを見てもたゞ雲の海

午前八時下山の途に就きやゝ三分の一を下りたる頃空のけはひ望みあ
るが如くなれば急に行程を變へて又もとの燕小屋へと引きかへす

雨やまば鎌尾根かけむ雨降らば常念小屋と心ざして行く

やがて燕小屋に達しいよ／＼尾根づたひにて縦走の道に就く

むらがりて谷越す雲のひま／＼に見ゆる高嶺の雪のさやけさ
雲はゆきくもは行けども鎗が嶺ゆ越え來る雲のはての知られぬ
はるかなる雲間に溪を見おろして岩がき越ゆる大天井のみち
谷かぜの雨吹きあぐる尾根づたひやうやく着きぬ二の俣の小屋

風雨烈しく鎌尾根の喜助新道へは行くべくも有らず、鎗を斷念して常
念へ向ふ、路は巨岩累々、寒雨足下より吹き上げ困難名狀すべからず

雨を卷き尾根吹きあぐる谷かぜのさむさは骨にとほるなりけり

行きなづみ友におくれて雲きりのうづまく音をたゞ一人聞く
うす雲のけぶりのごとく巻きのぼる這松のはらに雷鳥あそべり

午後五時頃漸く常念小屋に達す

人活かす是れの圍爐裏よありがたき常念小屋のこれのゐろりよ
這松を折りては燃やし這松を折りては燃やしよそごゝろあらず
山の小屋にゐろり焚きつゝ夜もすがら雲吹く風の響きをぞ聞く
昨日今日雲のうへのみつたひ来て今宵もいねぬ八重雲のうへに

明くれば十八日雲霧益々深く前途の望み全く絶えぬ、上河内の温泉に

下らむとすれど夜來の雨に一ノ俣の橋の落ちたれば徒渉不可能なりと

云ふ、いかにせむかと思ふうちに大町線の方なる烏川の溪谷より登り

來れる人夫あり、それに聞くに此の道は一二の徒渉點はあれど今より

下らば未だ徒渉の出來ぬ事はあるまじと云ふに即時出發す

岩をよぢ這松くゞり谷風の雲巻く道を今日も行くかな

いく年を経しとも分かね倒れ木のかさなる上をくだるなりけり

岩も木も苔もて成れる谷道の暗きかけ路のはての知られぬ

大小の徒渉點もからうして涉り桐扇と云ふ所まで下る

木こりだにやすくは行かぬ谷みちの常念下りよくもくだれる

くだり着き思へば畏こ斯くばかりあやふき道をよくもくだれる

山ずそに人の家居は見えながら未だはるけし大町だひら

漸くにして穂高村に出で大町線中央線を経て歸りぬ

高嶺尾根くるしき道はよぢしかど此の世の外のけしきをぞ見し

初春の郊外を

春あさき都のそとの路のべの杉のかきねに雪ぞのこれる

春光遍と云ふ題にて

山あひの炭やく小屋のけぶりまで霞になびく春となりにけり

夏の歌の中に

水雞聞く時ちかづきて吸ひかづら薫る堤は夏めきにけり

夏やまの谷より出で、行く雲をかるきころに見るあしたかな

初夏人々と洗足池畔なる高木貞廉翁の別業に遊びて

雲雀鳴くかはせみの鳴く頬白の鳴く よしきりは今日のあるじと

聲絶えず鳴く

よしきりは鳴くが務めか聲絶えず鳴く 菅の根の永き日ねもす聲

絶えず鳴く

秋の歌の中に

萩むらをたましく過ぐる小夜風にしづけさまさる草のいほかな

夕づゝのうつる光りも宵々に秋さびまさる利根がはのみづ

いとはやも小鳥のむれのはるかにもわたるが見えて澄める空哉

春近しと云へるころを

昨日今日霜のなごりの打ちかすみ春遠からぬけしきをぞ見る

歳暮述懐

人の道ふみたがへぬをせめてもの心なぐさに年をむかへむ

○

同十四年詠

春の歌

月かげもものなつかしくかすむ夜の草のいほりを訪ふ人もがも

梅雨のころ

くちなしの薫り露けし梅雨の晴れむけはひも甲斐なからまし

夏の頃逗子の久留輪と云ふ所にありて

汐ひけば磯もの探ると海士の媼が腰に籠さげ濱にいで行く

年たかき媼にはあれど磯ものを取るにかけては並びなしと云ふ

網負ひて歸る女の顔見れば宿の嫁なりみめよかる嫁

浦の海士の鯆網舟に乗り見るも都へつとのひとつなりけり

魚を寄する撒き餌の糖蝦の鹽漬を面白きかもコマセとぞいふ

魚こませ魚來ませよと撒くからやそれをコマセと名には呼ぶ覽

汐の早さ魚のあらましこゝろむるためしの釣はおろされにけり

みぎりにも又ひだりにも釣糸をおろす間なげに魚つりあぐる

たぐりあぐる隣を見れば舟の上に二た並びても鯆のをどれる

鯆の獲ものかゝりしと云へど魚釣に馴れぬ我が手は何も響かず

流れ行く底の潮瀬のはやければ所かへむと碇あげにき

ゆり上ぐる波おもしろし舳にたてば山のひたをに居る心地して

此所よしと下す大網舟ばたは打ちかたぶきて波にひたれり
おほ網を下し終へたるしばらくは煙草くゆらし話にふける
ほどよしと上ぐる大網よりくゝに手ぐりし來れば波の底光る
鱒のなかに小鯖もまじり名のわかぬか青き赤き魚もをどれり
網を入れし三度ばかりに舟の中の生けすは早も満ちに満ちたり
もの妻き甲賀伊賀組の忍術のそを思はする蛸のふるまひ

月の歌の中に

こゝろ散るものゝ音もなしさ夜ふけて月と我れとの草の菴は

秋の歌の中に

澄みとすむ心のそこにかよひ來る秋のなが夜の雨だりのおと

よしと云ひいまだしと言ひて紅葉見の此所と云ふ所定まらぬ哉

秋の末つ方鶴見なる山村邸を訪ひて

かすかなる掛樋の清水澄みとほる君が心のおくをしぞおもふ
かくばかり澄ます心のしづけさを汲み知る人は少なかるらむ

高原越

高原山は鬼怒川の谷と鹽原の溪との間にある山なり、十月卅日鬼怒川
の上流なる川治の温泉へものしたる折ゆくりなく思ひ立ちて鹽原へ越
えぬ

第一日 大瀧温泉

ねり絹を引けるが如しうべしこそ其名負ひけめきぬ川のみづ
きぬ川の谷さかのぼり大瀧のやまの出湯に今日ぞひたれる

山ふかき雲間の月をながめつゝ都遠しとおもほゆるかも
溪の音を聞きつゝ寝れば白き岩か青き水の目をしはなれぬ

第二日 川治温泉

しげ山のかげをひたして岩淵にうごくともなき水のいろはも
いつの間か溪に離れし遙けくも有るかなきかの水の音きこゆ
溪の音は聞こえ來にけり心ざす川治もいまや近づきぬらむ
流れ行く水よりほかに何ひとつ動くものなき谷あひのむら
大岩をおのづからなる覆ひにてたゝへしみ湯は上つ世おもほゆ
松杉のこずゑを越して夕やまの紅葉のいろを見るがしづけさ
打ち見ては見過ぐしかねつ常ならぬ高原越えをおもひ立ちぬる

明日越えむ高原ごえの高嶺みち願はく雲の晴れよとぞ祈る
明日越えむ高嶺は峻し谷川のおとを聞きつゝいざ枕せむ

第三日 高原越

きぬ川の溪にわかれて登り行く山路けはしも山の脊ながら
高はらのか黒き嶺は錦なす八峯のうへにあらはれにけり
溪みづのひゞく遠音もよりくくに聞こえずなりぬ山を深みかも
岩くゞる木々の下つゆ鬼怒川のこも源のひとつなるらむ
峠にやちかづきぬらんにはかにも坂路ゆるびて木の間あかるき
打ちつゞく高嶺の尾根は冬がれの裸木たてり峯をたかみかも
茅原とも沼ともわかぬ草の原のあたりめぐりて大木こだれり

千歳經し木々のしづくのあつまりて成れる沼かも見の恐ろしき
おそろしき大木こだれる隠れ沼の暗き底にはなにの住むらむ
行けどく唐松生ふる野邊にして山路のさまにならんともせぬ
から松の林いづればにはかにも路のくだりて溪のおときこゆ
千歳經し楡の大木の空を覆ひいづくともなく奇しき鳥鳴く
行く水の溪には成らで苔ふかき大木の木根をひたしてぞ行く
立ちながら枯れし大樹の朽ちずして白く立てるがもの凄きかな
木々のさま谷のながれもよりく常にかはらず成りて來に梟
谷に下り山合めぐりはるけくも下りし來れは家むら見ゆれ
川治いで、越ゆる高嶺の四里の道ひとの一人に逢はぬなりけり

枯野を

中々に枯野の日かげのどけて松のみどりぞ身にはしみける

冬將盡と云へる題にて

冬がれのみ山ながらに何となくかすむけはひの見え初にける

溪流を

平岩のつらなる谷の岩どこを水のながれて岩切り通す
百代千代八千代萬代ゆるびなく水のながれて岩切りとほす
岩むらを躍り飛び越えさくなだり生けるがごとく走る水かも
谷水の五百津岩むらにせかれては山もとろくひ々きたてけり
岩瀬過ぎ淵によどめばもとよりの心にかへり水のしづけき

過ぎにけるいにしへ思へば 世の中ははかなかりけり 竹芝の芝
のいほりに なびき寄るあまたの人等 折々に琴かきならし 今
様ををかしく謠ひ をり得ては野山をわけて 歌思ひ遊びしある
き よそ事の思ひもあらず 面白く過しける世の その世らの常
にありける ちゝのみの父逝きてより 十年あまり七年経ぬる
今日にしてかき數ふれば 悲しくも寂しきかもよ その世らを語
らむ友は 手ならべて十にいくだも餘らざり 梟
むら肝の心ゆくまで在りし世のありのことく 談りかはさむ

○

同十五年詠

躑 躑 を

色濃きはや、時過ぎてうすもの、涼しのつゝじいまさかりなり

ひゝなの繪に

いつくしく竝ぶひゝなは世の中の老いてふ事を知らぬなりけり

春の歌の中に

野の邊より名もなき草を移しつゝ春をたのしむよもぎ生の庭
萌え出づる草のとりくゝとりくゝにおのが態々延びたちいそぐ

時鳥遠しと云へる事を

うち渡す遠山もとのほとゝぎすかすかながらに聞くあしたかな

初夏の歌

はるかにも見おろす谷の若葉より若葉にわたる鳥は何ぞも

雨漏を

板屋ぶき降る梅雨に雨もりのあなにかくしところさだめず

野外にて

小さき草大きなる草とりくしに時をたのしみ花咲き實のる

夏のある夜

野分だちや、荒ましく吹く風に葉ずれすしき庭の竹むら

相州酒匂の海岸に夏を過ごしける頃

笹はらに晝鳴く蟲の夜も鳴き風の無き夜をい寝がてぬかも

竝松のたかき梢に鳴く蟬のあしたのこゑはすしかりけり
川ぐちの長きいで洲に胸じろの鷗群れ居り波を脊にして
ひとめぐり飛びめぐり來ては同じ洲に鷗竝み居り頭そろへて
はなれ洲に鷗やすらひ村千鳥足がきいとなく濱づたひする
波に追はれ波を追ひして濱遠くはしる千鳥のおもしろきかな
波ぎはを走る千鳥の百足がき目にもとまらぬ足がきめぐしも

同じ折伊豆山に遊びて

をりくしに横ぎる雲のかげを得て息づく夏の山ずそのみち

野分を

槻かしは草葉のごとくなびかする野分の力ものすごきかな

せむすべのたどきを知らに吹きつゝのる野わきの夜半を畏り居り

海上月

和田のはら夜かぜに高き波の穂の光りもすぐく月はいてにけり

望の夜月見えざりければ

久方の月は見えねど見えずともさゝげまつらむ月のおものを
月よみの影は見えねど萩すゝき手向けまつれば夜のなつかしも

秋の頃 (長歌)

此朝け百舌鳥の聲聞ゆ 野邊にては月初めより 鳴き居りと人は
言ふめる 木犀はかすかに薫り 萩の花盛り過ぎたり 黄蜀葵の
花も終りて それが實は大きくなりぬ 雁來紅のやゝすがれしは

過ぎにける野分のあとか 瓢箪に實のいりぬれば 只一つなれる
其實の 大けきを取り入れにけり つは蔭のつぼみぬき出て 梅
もどき葉がくれながら 愛しけくも赤らむ見れば 此秋の最中も
やゝに過ぎむとすらむ

薄を (同)

すゝきは若薄よし 穂にいでゝなびく又よし 尾花のほどろにな
りて 露じもにうつろふもよし 霜とけぬ冬の日あたり 枯れが
れにくづほれたるは更にまたよし

今上陛下御惱重らせ給ふと承りて

天つ神國つ御神よ民ぐさのねがふねがひをうけひきたまへ
あまつ神くにつ御神よちはひあるすめら御國をまもらせたまへ
昨日今日置きどころなき我がおもひ神に依るより外なかりけり

崩 御

やすみしゝ我が大きみを今日よりは先つみかどゝ言ふが畏こさ
張りつめし力も抜けて昨日今日何すともなくかしこまり居り

昭和

昭和二年詠

春の歌の中に

朝びらき出で行く船のあとにのみたゞ一筋の浪ぞ見えける

秋のくれに

岸の邊の茅原の夕日かげろひて秋ものさびし河おろしのかぜ

冬の歌の中に

あづさ弓春の南はつねながら冬めづらしき今日にもあるかな
しも解けの路はぬるか行くひとの道よは行かて枯生ふみゆく

しも解けの路なやむらし老いびとが腰に手を當て腰のばし居り

高木貞廉翁に濱菅の根にて作れる筆を參らすとて

大君の御幸の濱ゆ採り來つる海士の筆草いはひてまゐらす
さすだけの君がよはひを長かれと我が取り來つる濱菅ぞこれ
濱すげのながきその根を筆にしてみよはひ祝ぎの歌書きまつる
遅れく今日ぞ參らす去年の夏きみがみために採りし筆ぐさ

或日の所見

何ごとを語るなるらむ行きあへる女のはなし盡むともなき
脊の上に子供は飽きて泣き居るを脊なをゆりくまだ話し居り

山村道丸ぬし病あつしと聞きし日

友の病重しと聞くにその寒さ身にしむ今日の雪の降りはも
いたづきの癒えぬこの身は友の許を訪ふすべだにも有らぬ也梟
今日明日にせまれりと言ふ友の病たゞ聞きてのみ過すなりけり
かず多く友は持てども心あひの友は少なし君にわかれむか
前にして我脊高畠いまにして山村ぬしに別るべらなる
かにかくと思ひしことも夢にしてつひに君にも別るべらなる
今しばし命よあれな今ひとたび君にすゝめむ我がおもふこと

山村ぬし終に身まかりぬ

我が知れる人の中にて世のなかをよく知る人は君にて座しゝを
何ごとも思ふがまゝにふるまひて然して則を越えざりし君

歌を詠む人は多けれど歌のこゝろ持たれる人は世に少なきを

同三年詠

元

のどかにもみ空の晴れて蘆鶴も鳴かむけしきに年立ちにけり

早春山と云ふ題にて

一すぢの雲のながれて筑波やまはつかに春のうごき初めけり

山村梅と云ふ題を得て

何がしの繪に見しところ家居あり谷あり橋あり梅ところどころ

早春の思ひ出を詠める

垣の外に麥踏む翁はこまつるぎ我が蓬生のこゝろあひのとも
翁もよすこし休ませお茶いれむ今日は晝より風のさむきに

春の歌の中に

咲きと咲く椿ばやしの木の間より見おろす海は邊つ浪もなし
雨氣もち更けゆく夜半になつかしき小田の蛙の遠音をぞ聞く

或日の所見

去年の夏竹箒持ちバツタ追ひしうなるが今日もバツタ追ひ居り
ぬき足に近寄りゆきて取るとすれど手の遅けれや何時も取得ず
遠くへも飛びはなれねば少し行き又少しゆきて又取りにがす
去年の夏もバツタ取り得ず此夏も未だ取得ず何時とらんとか

常陸なる那珂、港と云ふ所に避暑して

常陸路の夏を知らずて此の年は涼しき年とかたりあひぬる
盆踊りをどる今宵と磯崎に子等は行けども我は寝にけり
松魚ぶね歸りにけらし小夜なかの港のこなた聲のにぎはふ
朝ぎりのふかきみなとの岸ちかくかゝれる船は昨夜の船かも
待ちわびし子等にやあるらむ松魚さげ親より先に走り歸る見ゆ
大松魚二つ三つさげ幅びろの脊を見せながら海人は歸り行く
廣き肩たくましき腕日にやけてひかれる見れば雄々しかりけり

○

我が居るは酒店なれば松魚舟かへりし來ればとみににぎはふ

此の家は松魚船にて親も死に祖父も死にしかば海をやめきと
松魚船みなどに入れるしばらくを寝て暮すあり飲みて暮すあり
あしたより暮にいたるまで膳の前に大あぐらかき酒飲むもあり
大聲にもは言へども腹ぬちは何物もあらず愛しき網子等よ
良き聲に磯ぶし唄ふ若者が今宵も來たりいざや餅買へ
酒も飲まず煙草も吸はず餅食ひて磯ぶし唄ふ愛しき若もの

筑波登山

十月二日登山す、江戸屋と云ふ旅館は山の中腹にありて眺望頗る宜し
ければ其所に一泊し翌朝頂に登る

百舌鳥の啼く杉の梢を下に見る筑波のやどはしづけかりけり
目路のかぎり大海原のごとくにて木原うねく波とこそ見ゆれ

忘れては海かとぞおもふ山越しにはるけく見ゆる常陸下總
見はるかすふもとの方を行くかげは我が居る山の雲のかげかも
法師蟬鳴きは鳴けども笹の葉にそゞろさむけきあきかぜのこゑ
雲のかげあとなく消えて見るかぎり野山は秋の夕日さすなり
山あひに夕べのいろは見ゆれどもまだ秋の日は暮れずぞ有ける
のどくと秋の日かげは暮れ行けど片かげさむし山嵐のかぜ
宿の女がいだす火をけに釜の湯のたぎるもうれし冬も來なくに
秋ながら夕さり來れば山おろしの板戸を鳴らす小筑波のやど
いづくより來るともなしに見渡しの夕べの色になりも行くかな

翌早朝山頂に登る

筑波嶺のそがひと聞きし足穂山たゞ目の下に見ゆるなりけり
筑波嶺ゆ見おろすかひにつゞきたる雨引の嶺にくもぞたなびく
すそ野なる木原家むら水なそこの玉藻のごとく薄みどりせり

女體の頂にて (長歌)

筑波嶺のひたをに登り 大岩のそり立つが上に 天地を見さけて
立てば 我が心我れを離れて天ざかり行く

何事のゆゑは知らねど峯の上にいまま天降りせし心地せらるも

男體の裏道にて

雨引の嶺をはなれてつらくに沖へ出て行く秋のしら雲
足穂加波雨引の嶺と遠ざかるはての高嶺は那須かあらぬか

白雲の煙のごとくいたゞきになびける見れば那須にしあるらし
西北の廣野のはての高山はみな白雲にへだゞりにけり

初冬見る所を

夕まぐれくぬぎ林の西風に吹きしをられて空の澄みたる

冬の歌の中に

霜こほる夜半のさむさの見ゆばかり並木の杉はいろづきにけり
冬がれのけしきながらに打ちけぶり春おもはする今朝の雨かな
洗ひ衣氷りこほれやおなじ物今日はた幾日かけて干すらむ

犬を飼ひける頃

たるげにも過行く犬の名を呼べば顔は見向かて尾のみ振り行く

犬はしもあまり聰きは人に似てうるさかり鳧間抜けたるがよし

土佐歌

此歌どもは土佐人ならでは聞分け難き所多し、こ

は弘田老刀目に聞え上げむと詠みたるが刀目亡せ給ひしかば其靈前に
捧げぬ

坂網 日暮るれば小田を求食ると山越えて沖より來寄る蘆鴨のむれ

夜もすがら求食り明して山の端の白めば歸る沖のあし鴨

里人は坂鳥獲ると長き夜を待ち明すなり山のたをりに

坂鳥の掛からはしもと待つ袖に曉霜の置きてさゆらむ

にろぎ釣 地嵐を傘帆に受けて松ヶ鼻離れも行くか
にろぎ釣り船

くる洲 沖つ風吹浦の沖の平岩のくる洲の上を浪の越す見ゆ

折にふれて

前の溝に蛙鳴きつる一昨年をおもへば家の建ちしものかな

人の或る事を問ふに

古き良し新らしき良し良きものは皆々よろし悪きものはわろし

良寛師を思ひ出で、

國上なる山田の田居に鳴くかはづ今も鳴くらむ聞く人なしに

高木貞康翁の御家に同翁の曾祖父正禮ぬしに白川樂翁公より給はりし

赤地錦の襷袋の傳はれるを見て

ひげ袋君のかけなば遠つ親に似て有らすらむがめでたかりけり

みよはひも高木の翁の白き髻そのしろき髻は代々の髻ならし

(今の翁も頗る美髯なり)

○

大嘗祭取り行なはせらる (長歌)

かしは舍の稻春み歌 采女等が搗く臼の 搗く臼の音に響き合ひ
て 今しかも大御祭のはじまるらむかも

同

此の夜らはいとも畏しもよ 此の夜らはよ ひたすらに畏まりあ
らな 家の子よ吾子よ

腰いといたかりし折

さらぬだに弱くもよわき弱腰をなど此のうへに痛めむとする

病に臥しける折

しんくゝとあたまのしんに響くぞややめてたもれよ其口笛を

○

同四年詠

元 且

成りならぬそれはともあれ何事か爲さまほしかる年にも有かな

初春の歌

土の下にかくれて見えぬ雪こほり解けずば草は青まざらまし

氷り居し庭しめやかになる見れば春のさむさも終りなるらむ
萌えそむる底の水草に里がはの水のぬるみも見えそめにけり
岩くゞる垂水のこほりうちとけて春をさゝやく山かげの庭

飼へる鶯鳴きはじむ

鶯がコキリコと啼くあたゝかき日かげよろこびコキリコと鳴く
鶯がコキリコと啼く折々はホケジロ共啼くホーホケキヨ共鳴く
此の鳥は敷うぐひすの二とせ子親につけねばコキリコと啼く

春の歌の中に

吹きゆるむ春のみなみに山かげの垂水のこほり落つるおとする
春の日に解けのこりたる谷かげの氷のしたを水のながるゝ

風よけの大木のつばき花咲けばめじろ群れ来る海ぞひのやど
おもしろき里の少女の茶つみ唄それも馴れては聞く人のなき
川口の干潟にいざるとま船のかげうちかすみ春雨のふる

路のたう

老人の好ませたりし露のたうにがきものよと思ひたりしか
子供等のにがしといとふ露の臺我れもむかしはしか思ひつれ

汐干狩を

日和よき今日の干汐に沖遠き浮き洲の岩の蝶螺とりに行かむ

今を去る卅餘年の昔父の御供して上總の富津へ行くと横濱より

和船にて渡りし其折の事共思ひ出で、

寝る鷗波に流るゝこゝちして我が乗る船の行くとしもなき
ほのくゝと霞む汐路にスナメリの浮沈みして行が長閑けさ

夏の歌

(スナメリはイルカの類)

雪の谷間下り来る人を折々にかくして過ぐる夏のしらくも
子雀の親呼ぶこゑもこゝちよく若葉あかるき雨そゝぎかな
竹むらにそゝと音して行く風の更けて涼しき草のいほかな

鹿澤温泉

此温泉は浅間山の北麓なる高原にあり、浅間山及

其續きの山は南より西に廻り、北は四阿山、元白嶺などの山塊を廻ら
し東は遠く上越國境の山々に續きたる奥上州の山を望み、南北一里餘
東西六七里に亘る廣袤なり、原野は草花を以て滿され、壯大にして極
めて平和なる氣ぶん類少なき所なり、道は信越線の輻井澤驛より草津
輕鐵にて鶴巻驛に下車、バスにて入る道と、信州上田驛より電車とバ

スにて鳥居峠と云ふを越して入るものと二つあり、己は八月上旬行けり、

朝かぜのすゞしくおろす草山のいづこなるらむうぐひすの鳴く
くさ山に鳴くうぐひすを風かよふ晝いのゆめのまくらにぞ聞く
山あひの草のほそ路信濃路にかよふとぞ言ふくさのほそみち
夕されば爐の火のけあしからず人の寄り来てはなしにふける
大かたは晝寢にふける湯のやどのしづけき外の面頬じろの鳴く
此の宿は庭も裾野も一つにてか黒き山に末のつゞける
山の湯のひる寢のゆめを洗ふにはいとよろしき春戸の谷かは
世に遠き浅間の裾の山の湯に今日もひたりて思ふことなし
なにごともしも忘れてぞ聞く世に遠き浅間のすそのうぐひすのこゑ

うつせみの世をたのしげに鳴きくらす浅間のすそのみやま鷺
なまじひに人なればこそ市に住め浅間のすそのみやまうぐひす
ほど近き山よりいで、今日もまた裾野をめぐる山ほとゝぎす
いづくまで裾野は行きしゆくらくいま歸り来る山ほとゝぎす

田代牧場を過ぎて天明の押出しと云ふを見に行く

天明のおし出し見にと馬なべてみ山の裾を横切り行くも
親馬の子馬ひきつれ數あまた我が乗る馬のあとに付き来る
人見れば何とか思ふ親馬に寄り添ひ立てり愛しき子うまか
散りほへる牧の牛馬牧人の呼ぶにやあるらむ集まり走る
谷に下り草野を越えていつまでも横切りゆくか廣きすそ野を

草あさき桔梗野を過ぎ萱野過ぎ眞萩の谷へ馬はおり來ぬ

蘇鐵めく奇しき山草谷かけて生ひ廣ごれり何と云ふ草ぞ

吹く風にぎぼうしの花うちなびき黒き胡蝶のむらがりて飛ぶ

山うどの林のなかを胸分けて馬やるあたりかみつ代おもほゆ

△

風かよふ晝いの枕すゞしさに日なたこひしくおもほゆるかも

宮古にも秋來にけむとおもほえて歸るころのうごきそめける

○

秋のはじめの頃

たゞ二日降りしばかりに庭のおもの木のしたうすく苔の青める

夕かげを待ちよろこびし夏の日の斯く短く短くはいつなりにけむ
涼しくも降りいでし雨の降りつゞき終に夏にはかへらざりけり

野分せし翌朝

春戸の庭の野分に折れし雞頭を大瓶にさせば富めるこゝちす

鳴を

夕べの空うつる水田のそこゝに足がきいとなく走る鳴かな

冬の歌

家の外のものみな鳴りて吹くかぜの木がらしだちぬ今宵寒しも
小夜ふかく聞きさだむれば足びきの山をつくして木枯の吹く
山かげの垂水のつらゝつらくに思へばながき冬にもあるかな

山かけの垂氷を見れば梓ゆみ春まちどほにおもほゆるかも

庭を

我が庭の冬木のかげの梅もどきそれも好けれどくちなしは又
去年の雪土をかづける庭のかげの山菅の葉は見るにさむけし
橘の木の實いろづきあたゝかき日かげたゞさす日おもてのには

朝海といふ題を得て

満つ潮のかなへるうへに朝日子のうつろふかけを寄する浪かな

波をよめる

沖つ浪おのれくだけてかへれどもつひには岩もくやすなりけり

細流を

苔くゞる木のした露の落ちあひてかすかながらに音をたてけり

漁村を

海に向ひ山を脊にして世のなかにかゝはりなげの海人の家むら

畔道

畔道をつたひし来ずば遠くとも行かれたらむを路は絶えにき

田舎に行きける折

我が乗れる車を見てか早くより路をゆづりて待つ人のあり

奥澤なる九品佛に遊びて (長歌)

世の中の一切の男子を父と思ひ 一切の女人を母と思ふ 此の
いたづきの涙ぐましも

御額ごがくの白毫びやくぼうにうつる春秋の彼岸の夕日ゆふひいかにたふとき
法のみち踏むとなけれど此のにはに來ぬる思へば縁しあればそ
み佛の九品のまへにたてまつる千部御經のたふとかるらむ

飼へる鳩の雌の暫く見えざりけるに或日それをつれて雄
の歸り來けるに

いづ方に尋ね得つらむ見えざりし其妻をつれて歸り來にけり
妻をつれて歸り來にけりはしきかも汝が好む餌を早もやらむぞ

或 日

味噌を播る音にそこらく似かよへる鋸のおとの隣より聞こゆ
日和よき今日の休日を家に居てとなりのあるじ何をつくらす

我も今日あたゝかければ兒を産みし犬の小舎なと直してやらむ

ある社の杜の杉を

白鷺のねぐらにすなる産土神の杉は青みてはるさめの降る

兄 弟

寄りあへばいさかひ多き兄弟も離れはてむはあらじとぞおもふ
我がまゝをかたみに言ひていさかふやこも兄弟の睦びなるらむ

少 女

男の子はも強けどはげし女の子けだし一人は持つべかりけり
人の家にやらむは惜しと思へども女子なればそれもすべなし

偶 成

人ごゝろ面わのごとも變るとも鼻を目口に替へたるはあらず

折にふれて

耳を覆ひ鈴を盗るてふことわざも斯る事より思ひつきけむ

なかばにて事なりげにも言ふ人の事は大かた成らずぞ有りける

人のなさけ受けむはくるし我が力有らむかぎりの我世ならまし

又

世の中の何によればか日に月にあらぬ方へとくだち行くが如し

世の中の人とあらそひ立たむにはあまりに我れの力よわきかな

力なき我はすべなみ世の中を心に捨て、天地にむかふ

天地のおのづからなる物見れば心にくまものこらざりけり

天地のおのづからなる一つにし我が成りなむぞ願ひなりける

又ある折人のもとへ

己が身をそこなはざるは親として子にし務むる務めなりけり

折にふれて

さしも無く我が思ふ歌を取り出で、人のほむるが寂しかりけり

我も其と思へる歌を是し良しと人のほむるはうれしかりけり

何ものに引かるゝならむ我が思ひおもはぬ方にうつり行くかも

同

我はもよ歌は拙し然はあれど世に此人と思ふ人も有らず

今の世に此の人と思ふ人の出でば誰れより先に教へ乞はなむ

歌の上に大きなる人の出て来ずばまことの歌はつひに絶えなむ

一夜眠られぬまゝに思ひつゞける

餘りにも行きつまりたる世の中の道のそこらく開けむとするか
世を救ひ人をすくふと國の基うごかさむとする醜等の有る世ぞ
今にして世の行く先の開けずば世は恐ろしくなりやはてなむ
皇國を脊負はむ爲めに悪しき事なすとばかりに驕れるもあり
義のためと善惡言はず行ひし博徒のむれにさも似たりけり
過ぎし世の博徒の群も悪しき事をおのが爲めには爲さざりし物
眞ごゝろのほか行く道に皇國をまもらむとても神はゆるさじ
船を呑む大きな魚のみ多くして危く網のやぶれむとする

村ぎもの心の高き彼の人とおもふ人まで網にかゝれり

黨の爲めやむにやまれぬ曲事とおもへばはかな人の身のうへ

そが爲めに曲事多くなるべくば世に政黨は無きがまされり

鹿を追ふ獵夫のともは山をしも見ずといへどもあさましの世や

狩人の取らくを知らにせめぎ居る斑鳩いばよしめよあさましきかも

斯く態にせめぎて有る間に外つ國の恐ろしき手は廻りはつべし

國民にこれぞまことの皇國と思はしむべき政事をこそ

くに民の心ひきゐて目ざましく進むまことの人を出でぬか

甲斐のなき事は思はじとおもへども小さき蟲にも魂の有り

甲斐のなきことを思ひていたづらに眠りもえせず夜を明しぬる

未だ未だ言ふは早けれど世の中にや、真心の動けるがごとし
はしきかも嬉しきかもよ堀切のぬし此の真心を掴みて立ちけり
人はいさ我れは然か思ふ堀切のぬしは掴めりと此の真心を
世は然かくめぐり來ぬると言は、言へ其を捉ふるは力あればぞ

國論漸く力あり

きはまれば通ずとこそ言へ此の國を救はむ力うごきそめしか
世の中のもののおのづから時のあり今ぞ其の時おほろかにすな
まこと有る民のさけびの世のなかにひ、かん時は近づきにけり
もろ人よいざ此の時ぞ皇國の世をやすくにとかためまつらな

言ふ甲斐のあるにも有らぬ我れ乍ら黙しおほせぬ今日にし有鳧

下村關路ぬしが京都にて歌の門をひらかる、折

世の中のもののおのづから時のあり今ぞ其の時おほろかにすな

(右は先に時事歌として詠みたる物なれど他に云ひ替へても此の勢は出でまじければ其まゝ之を呈す)

後の世に其名つたへむ歌人をつくらんための神のすさびか

うつそみの世にある甲斐の思ひ出に有らむ限りの力いださな

同じ折京都の津田壽一ぬしへ

同じ世に生れあひたるおもひ出に盡したまはれ我が友の爲め

佐布利支那公使の自裁

世の人のたのみをよその死出の旅こは何事の有りてなるらむ

春の歌の中に

雨まじり降り出てぬれど沫雪のつひに雪には成らでやみにき
 春の来てまだほどなきに此の夜らの床あたゝかし雨にかなる覽
 三井寺の春の木の間のともし火を思ひ出でにけりおぼろ月夜に
 ま遠にもみぎはの洲鳥鳴きかはし寝ざめのどけき津の宮のやど
 梶の音に寝ざめて見れば明けそむる春の川戸はかすみわたれり

晩春の歌の中に

春ふかき若葉の山につゝきたるみ寺の庭のあめのよろしさ
 庭の梅の芽ざしあかるく日かげさしはや何となく夏ごゝちする

春の一日

しかすがに都のそとよめづらしき地藏和讃のこゑの聞ゆる
 ま遠なる和讃のこゑに春の日のいよいよかすむこゝちこそすれ
 うつらくねぶり催す日あたりに和讃のこゑを聞き送りつゝ
 やよ子等よ和讃の聲の我が門にめぐり來にけりお布施とらさな

幼かりし頃の思ひ出を詠める (長歌)

上げ田には麥生あからみ 緑濃くなれる端山に 時鳥をちかへり
 鳴き 衣手のかろさ覺えて 心地よき夏のあしたに ちゝの實の
 父の命が 斯し良しと教へたまへる 緑樹千山杜宇の聲 野亭の
 麥飯將に新を嘗むべし と 其の唐歌をたゞ獨 山に向ひて詠ひ

つる昔思へば遙けくもあるか

同 (同)

垣の外に木の芽を摘み 胡麻がらを集めてたゞき 桑の實をもち
ては食うべ 菱の實を引きては採りし 故郷の竹島のべに 住ま
へりし頃をし思へば はゞそばの母もいましき ちゞの實の父も
いましき 父母のましゝ其の世の 竹島の昔思へば 我がよはひ
五十路過ぐれど戀ひしさに堪へず

又 (同)

櫨たぐの木の木の芽を壺へ 枸杞くきの芽を浸しものにし 虎杖こぞうを鹽漬に
しつ たまさかは餅もち作ると 卷き柴まきしばと言ふなるものを 山に行き

その葉を摘み來 胡顏こげん子こシャシャブブ天仙てんせん果が桑そうの實み くさぐさの木の
實みあさると 兒こ供どもどち遊あそびあるまし そのかみの春秋思へば い
とゞしく戀こしきろかも 都みやこべに出いで來きし今は せんすべのたどき
あらねば 在あるものも在あらぬもあらめど いにしへを偲おもふたどき
と 櫨たぐの木の枸杞くき虎杖こぞうと つぎぐに庭にわに植うゑ生なふし心こやりにせむ

まき 柴 (同) (源名三篇末)

今日はしも餅もち作ると たらちねの言はすまにく 嬉うれしさを包かみ
もあへず 脊戸山せとの木の下した分わけて かたま持ち一人摘とみしかその
まきしばを

脊戸山せとの木の下した分わけて卷まき柴しばを摘とみしむかしの忘わらえなくに

或日人々と舟して埼玉なる元荒川の河原曾根と云ふ所に遊ぶ(埼玉縣地)

川水を硯にくみて詠み出づる今日の遊びの歌やいかならむ

舟を河原曾根の中流に停め水禽の聲を聞く(長歌)

葦切のしば鳴く中に 鶴も啼き水雞も鳴けば 折々は鳩も鳴くな
り 舟とめて耳を澄ませば 聞き知らぬかそけき聲の さまさま
の聲も聞ゆれ 芦五位か黒鴨の遠音か 將やはた忍び音に鳴く驚
のどちらかも

河原曾根そのの汀の川社よしきりの子の祝詞さゝぐる

舟は蘆葦の間を過ぎて下り悠遊暫時舟首を廻らして溯る

よしきりも水雞のこゑも風たてば芦の葉ずれのおとになり行く

さまざまの聲を聞きつゝ行く水のゆたかに今日をくらしつる哉

二度鹿澤温泉に行きける折

今年はも鹿澤のやどに思ふ事歌にも詠まで寝ころびて居り

谷水のおとかと聞けば秋かぜの野邊を過ぎ行くひゞきなりけり

歸らむとする折

積まむ荷のやゝ多かれれば若き馬に明日はや鞍を着けて來むと云
や鞍とはいかなる鞍と來しを見れば火燧やぐらを二つ着けたり
振り分けに火燧やぐらを仰向けに馬に着けたり二人乗れと云ふ
片々に末の靜夫と荷とを乗せて我れは片々に足を下げて乗る
やせ馬の進む一足ひとあしにゆられて行けば腰のいたきかも

人の乗れるさまをし見れば昔めきて長閑に見ゆる振り分やぐら

九月央ば近郊のみ寺めぐりせむと先づ碑文谷なる圓融寺に参る、此み寺は
慈覺大師の開基なる由にて特別保護建造物なり、二王門の二王尊は大師の
作なりと云ひ傳ふ、

このあたり御祭りならし森越しに鳴らす太鼓の音のにぎはふ
男の子等は揃ひの浴衣女子どもは髪かざりして野みちねり行く
えにしありて残らせたまふ二王尊こそ武藏野のほこりなりける
むさし野のかゝる所にかゝるもの残れるおもへばありがたき哉

それより九品佛へ参る

いつ來てもこれのみ寺の同じみ堂三つ竝べるを尊くぞおもふ

軒端の紅葉

軒端の紅葉今年はめづらしき迄良し

大方は色にいでたるもみぢ葉の残るみどりもけしきありけり
あたゝかに日かげたゞさし眞さかりの軒の紅葉に吹く風も無き
もみぢ葉にさす日ゆたけき秋の日の寂しき冬に入りしともなき
小春日の昨日も今日も風なきに一葉も散らず軒のもみぢ葉

風や、吹き出でたり

明日よりは吹かずもあらなむ西の風惜や紅葉の終りちかきに
しばらくは霜もな置きそしばらくは風もな吹きそ軒のもみぢに

又の日

はつかなる一本なれど秋のこゝろ澄すにたれり軒のもみぢ葉
庭の塵清めしうへに一葉二葉散りそめにけり惜きもみぢの

又の日風吹く

いかならむ風のすさびぞ散り方の近しとおもふ軒のもみぢに
散りがたやまだきなるらむあらましく風は吹けども軒の紅葉
あらましき風に堪へたるもみぢ葉の夕日にはゆるいろぞ静けき
秋の日の暮れなむとしてもみぢ葉の木の間に淡き月は昇りぬ

奥刀根の秋

俄に思ひ立ち奥刀根の秋を見むとて行く、車中乗

り合へる土地の人の話を聞くに、利根入の方は谷川温泉がよろしかる
べく、西入の方は笹の湯、法師など殊によしと云ふに後閑と云ふ驛に
下り自動車に乗る、道は利根の源流の一なる赤谷川に添ひてさかのぼ
り三里餘にして笹の湯に至る、此所は谷浅からずして宿もよろづ清ら
なり、谷を隔て、二つの湯あり、溪水が右方の山の迫れる所を突き穿
ちて流れ来る谷の戸に臨み居れば、洞なす岩根より谷川の流れ出で來
るやうに見えていと面白く、又見上ぐる山の中腹に街道の通り居れば
樹間より甲斐の猿橋めく橋の見え其ほとりより小さき瀧の落ち來る

など紅葉は良しあまりに景色に締りありて何となく庭めける心地のせ
らるゝばかりなり。谷水の音を聞きつゝ枕に就き、さて翌日は法師へ
と思ひつれども相憎く今日は自動車の出でずと云ふに惜くも思ひと、
まりぬ。宿の主の云ふを聞けば此街道は三國街道とて昔は越後へ越ゆ
る唯一の道なれば信越線の開通せぬ前は相應に旅人もありしが今は廢
道同様になれり、されば昔のなごりとして此の上の方の猿ヶ京と云ふ
所には關所の跡本陣の跡もありと云ふに、そこらあたりにも見て來
むと行く、猿ヶ京はいと物さびて衰れなり、關所の跡本陣の跡も残れ
り村を出で離れたるあたり景色良く、左右より迫り來れる山々の互違
ひに重なり重なり奥へ奥へと重なり行く其奥に三國峠邊りにや薄雪を
かづける高嶺聳え立ちたり、今日は歸る日なれば惜きみ山に別れて下
り道を徒歩にてゆくらくもとの後閑驛に下り赤城の夕景色を眺めつ
ゝ汽車にて歸京の途に就きぬ。

秋の日の晴れむとすらむ打ちわたす秩父山なみくものはなるゝ
奥利根は紅葉のしほも過ぎなくに早や雪しろしみ越路のやま

奥利根は山ふかけれどいまだしも雪を見むとは思はざりにき
此所にては軒の干し柿蕎麥のはな雪を見そむる山ごしのやま

笹の湯にて

相生の笹のいで湯は谷ふかみ紅葉のそこに居るこゝちする
板ぶきに石を乗せたる家づくり谷の紅葉にふさはしきかな
おほ空は軒にかくれて谷がはをへだてし岨のもみぢいろ濃き
此所の湯に下り來とならし打むかふ岨のほきみち人のこゑする
我が來しは彼の道ならし打ちあふぐ山のなかばを人のゆきかふ
谷風に吹きあげられてもみぢ葉の同じあたりをさまよひありく
もみぢ葉に鋒杉まじる谷あひの夕べのいろをなにとか言はむ

夕ばえのみ空うつろひ板ぶきの色のひえく暮れて行くかな
暮れそむるもみぢの岨に湯のやどの淡き火かけを見るが宜しさ
山の温泉はしづかに更けてさらく〜と時雨おほゆる谷川のおと
たに水を遠音に聞きてうつらく〜寝る夜しづけき山あひのやど

翌朝

山の温泉のさむきもうべな今朝見れば板屋眞白に霜ぞ置きける
湯の宿の板やの屋根にいちじろき今朝のあさけの霜の降りはも
あさ日かげまださし來ねば谷かげの板屋の霜は解けむともせぬ
朝日かげ紅葉の岨にさし來れば待ちよろこぶか鴨どりのこゑ

山の男がわら家の庭の日あたりに干して打てるは稗のみのり穂
陸稻だにくるしきものを此所の人稗をかしぎて米に替ふらむ
つち倉の壁のくづれもさびしきにかすかにひゞく稗を打つ音
日あたりに干して打つなる稗の實を何すとおもへば涙ぐましも
水車物搗く音の世の中にうとき響もさびしかりけり
おほらかに見ればこそあれ山ざとの世に遅れたる此たづきはも
うち見ては思ひなげにも見ゆれども世過ぎかなしき山の奥はも
谷みづのかそけく見えて落葉踏む音のしづけき山ぞはのみち
み越路のさかひの山はたゝなはる紅葉の奥に雪をかづけり
越近きみ山なるらしうす雪のかゝる高嶺を雲の越え來る

歸途赤谷川の峽谷を見て

大ぞらにそり立つ岨の岩もみぢ日かげ見ねばや色のすごしも
とうくと音はひゞけど谷ふかみながるゝ底の水の見えなく
谷そこに引き入れらるゝ心地してながくは岸にのぞみ得られず
我が寄れる其の岩ほだに頼みなきおもひせられて心やすからず
山かげのそはのかけ路をはなるればまだ秋の日は日高かゝり梟
風なきにかそけき音の聞ゆるはおのづから散る木の葉なるらむ

歸途の車中赤城山を望みて

うす雪の夕日にはゆる嶺の上に望の夜ちかき月はのぼりぬ

なかくに霜ぐもる夜のさむからて春をおぼゆる月のかげかな
この夜らよ霜にいためし足なうらの頻りにかゆし雨降らむとか
今日も暮れ昨日もくれぬ冬の日の何すともなく斯くて暮れなむ
春をよし秋をよしとおもへどもはたれ霜降る冬のあしたも

朝雲と云ふ題にて

あさみどり晴れしみ空にたゞひとつ朝日をうけて雲のゆく見ゆ
あさなく山を離れて行く雲のゆくへはるけき大和田のはら

古 畫 を

繪がきしは誰とわかねど古繪卷たゞびとならぬ力なりけり
いつの世のものかわかねど眞むかへば頭のさがる繪卷なるかも

ある友を

野山への旅を思ふとき彼の友の男ならばとおもほゆるかも

隣の女の子

年よりも身のたけ高きとなりの子鶴脚してもとびありくなり

捨 小 舟

幾年を海士は乗りけむ芦はらに水づき朽ち行くこの捨小舟
命にはかぎりの有れば捨てられて朽つるもすべなこの捨小舟
芦はらに水づき朽ちゆくこの舟もその盛りはありしなるべし

或る山里にて

世の中に足るを知らぬもよからねどこは又あまりなさけな態

我が見ぬは二年三年畑なかに多くのひとの街をつくり住む

チンドン屋

いづ方の賣出しならむ大きな旗を押し立て町をねり来る
丈け高き笠をしかぶり顔を塗り身振り首振り大鼓たゝき来る
笛吹ける其顔見れば鼻しろく頬をあかくぬり眉をかきたり
親もあらむ妻子もあらむを妻子等の此態見れば如何にか思はむ
世の中を斯くしせざれば過し得ぬ人をしおもへば涙ぐましも

目黒千代子ぬしより、昨十八日にて當地に移りてより十
週年になれりとて「丸山の高木のもとに住み馴れていつ
か十年となりける哉」とありければ

過ぎにける十年ぞ早き來む先の年の十とせも斯くや過ぎなむ
とし月の過ぐらく早し一年を三年四年に思ふすべもが

世の中を詠める

世の中の物に陰ありその陰を消たむとすとも消たるべきものか
物みなは裏表あり陰と日向男女のかはるべくもあらず
世のなかは平等の中に差別ありとうまく言へるよ世の中は斯く
今の世をわろくなれりと歎く人いともさはなりまことわろきか
往昔を良しと言へども往昔の悪しかる事を言はぬにや有らぬ
今の世をわろくなれりと歎けども良くなれる事もさはにし有鬼
世の中の移るがまゝに世の中の良きも悪しきも移り行くもの

必らずも物に陰ありそのかげの消えぬ限りは悪しき事もあらめ
夜の間のくらき時より日の中の明るき時の長からむをこそ
我が國は日の出る國ぞ天つ日のやぶし分かぬ國ぞ日の長き國ぞ
うつせみの世の何事も其まゝに在るがまゝにてよろしかるべき

折にふれて

未にも老いし心は持たねども我を老いたりと子等の言ふなる
鬚をそれ髪をけづれと耳につく蚊のごと子等の云ふがうるさき
まことには老いしにあらず病ゆゑ然か見ゆめると我は思ひ居り
この病癒えしいえなば男山わかき心にわれかへらむぞ
世の中をかたくなゝらず過さむは壯き心にしかずぞありける

むらぎもの心の高く廣からば老いてもわかきこゝろなるべき

あゝる折

詠み出でし我が歌を見てつくぐとおのが心の程をしぞおもふ

十一月十三日濱口首相遭難す

今も世にかゝるやからの有ることをとがめぬはいかに天地の神

同六年詠

年の初めの七日ばかり

この日頃降らむきざしに寒かりしみ空はつひに雪になりにけり
しかすがに冬なりけりと思ふまで寒さ身にしむ今日の雪はも

霜よけの俵にのこる米喰ふとすゞめぞ來よる雪の降れ、ば
すゞめもよ友つれて來な汝がこのむ大麻の實をこゝに置かむぞ
萬歳の鼓のおともものどかにて昨日の雪のあと、しもなき

あたゝかくなれる日和か遅けれど年ほぎめぐり思ひたゝばや
深みどり晴れしみそらをあたゝかみ野山にさへもうごく心か

早春の庭を

春さむき霜にやつれてゆづり葉のもとのみどりにいまだ返らず
霜雪に堪へしつかれの目に見えてみどりさびしき庭の櫨の木

銅かざらの歌

みづくし銅のいろの櫨の芽のめはり初めけり雄々しきろかも

銅は雄々しきいろかも神代にも其名ありけり赤銅八十梟帥

瑞々し久米のわくごが採り持ちし彼のかぶつゝい眞金なりしか

御代の名にその名負はせて喜びし其の御代を思ふ和銅と言ふ年

銅鐸は神代より有り銅の銚も神代より在れど渡し來しものか

吹き分くる術をし知らず土にふける天然銅を採りにけらしも

雄々しくも山の底ひにあかゞねを掘り掘る今を見むとしゝ思ふ

あかゞねは雄々しき色かも我が國の人の膚へもあかゞねのいろ

苗床を

苗どこに蒔きし草の種みな萌えつ植ゑし植ゑても植ゑ所なき

こゝろして種は蒔かなむ苗床にのこされし苗はあはれなりけり

あまりにも植ゑく／＼しかば梅雨におどろが庭となりぞしにける
おどろが庭

あまりにもおどろに成ればさみだれの露のした草花咲かずけり
降る雨におどろがもとの下草を哀れと思へどせむすべのなき
雨晴るゝ庭のおどろを刈りそけてところ得させつ露のしたくさ

橡らうの木き
或所のおどろの中に橡の若木を見出でつれば今春根こじて庭に植う

嬉しくもとちの木得たり橡の木は葉の大きくて心地よきもの
辛夷ごいぞと言はれて見れば何となく木膚冬芽のいぶかしげなる
去年の秋見おきし物はすく／＼と愛しき大葉の付きてありしが
こぶしぞと人の言はずに橡の木もやゝに辛夷にならむとぞする

根こじ来て植ゑし若木の辛夷にも橡にもならで枯れにけるはや
散歩の折

雨けもつ雲はうごかて椎の花むせぶばかりの香に匂ひつゝ

汐干しほ狩かり
千葉の登戸にます平井直ぬしより汐干狩に來よと
あるに五月の月頭の汐やよけむ三日あたり参らむと申し送り置き参り
なむ人々を催し集めて参る

こゝちよく晴れもはれたり大ぞらはねがひし如く晴れも晴たり
汐干にと出て行くならし江戸川の川のかみしも舟のつら／＼ぐ
野邊遠く舟ひき上げしごとくにて海としもなき干かたひろしも
水脈の水小川のごとく流れたる干かたのうへに舟とこころ／＼
はる／＼も來ぬる干かたか返り見る陸地ほの／＼打ち霞みつゝ

たづさへし網のふくろに貝の満ちて手拭にまで包みぬるかな
獲物重み人にたのみて来るほどに又も採りしが重くなりぬる
波の穂のほのくく白く風に立ちてなぎさはるけく我を追ひ来る
福岡の刀自は心の利きたれば手ぬぐひ縫ひてふくろとなしぬ
遠浅の砂にあとある貝の目のおもしろき目を見つる今日かな

(干潟の砂に丸く窪める所あり其所を掘るに必ず貝ありそれを貝の目と云ふ)

初夏山村

山ふかみ時遅れ、や此所もまだ春の蠶がひのなごりいとなき
板ぶきに石を乗せたる家むらの若葉の谷につゞけるが見ゆ
山の女が桑刈りかへる坂のうへの若葉のなかにづゞく家むら

雀

子をつれて雀ぞおり來此の庭にはぐ、むしろのあればなるらむ
し々に鳴く雀のこゑに目をやれば見知らぬ猫の庭を過ぎ行く
いとなげに雛をはぐ、む親すゝめおのが餌を攝る時はいつでも
いとし子をはぐ、むにさぞ骨の折れむ待たな我今蒔餌とらせむ
おのが子を三つ並べ置き片はしゆ餌をとらすもよはしき親かも
ひとりして餌を食ひ得ねば口をあけて親を待ち居り子雀の三つ
餌を得ればひたすら子にぞ食はしむる腹はへりても楽しかる覽
子雀よよきほどにせよ汝が母は先のほどより何も食はぬぞ

梅雨の思ひ出

脊戸の川に待ち網おろす人ごゑの夜たゞ聞えて雨のおとしげし

雨暗き堤のもとにうごかぬは蝦とる人のかゞりなるらむ
あか土にいり糠かて、隣の翁蝦寄せつくる我をもつれさせ

夏の眞盛り

並木だに植ゑぬ長手の石だ、みかぶつく眞日のいらくゝに照る

秋の頃日々の歌として詠みけるもの、中より

己がじ、むぐらの庭に鳴く虫のこゑのかぎりをつくしてぞ鳴く
更けぬれば青松蟲も鳴きやみてしゝに聞ゆるこほろぎのこゑ
心して聞きさだむればこほろぎもおなじ聲には鳴かぬなりけり
蟋蟀のそれかあらぬか能く聞けばまだ聞き知らぬ聲もまじれり
こほろぎのや、鳴きやみて鉦たゝき間近き聲に鳴きいでにけり

目ざましき盛りもなくて庭の萩の雨のすさびにうつろひにけり
うつし植ゑて月の夜ごろの待たれつる庭のを薄穂に出でずけり
雨の後のやつれも見えていと早も小さくなりぬ黄とゝろの花
紙芝居來ぬるしるしに木を打ちて兒等を集むる聲きこゆなり
學園ゆ歸りのおそき末の子は紙しば居をし今日も見らむ

むし暑き風のすさびに簀の子まで吹き入る雨をこゝちよく見る
降る雨に根のゆるびたる雞頭の風にもまれて倒れむとする
風を受くる大木のボブラ空に鳴り葉の切々に散りほひて來も

家の子が屋根をあるきし報いにや古からぬ家の雨漏のすも

○
後うしろてのあき地よろしと年々に鳥うつくるも兒等のすさびに

めぐりより草の生ひ来てよりくくに狭く成り行く兒等の畑か
大根あり豆も實になり芋もありかみらもあれどみな草のなか
鳥とも野らともわかずなりぬれば虫を聞くにはうへなかりけり
今年よりなりはじめたる栗の實はそこらの兒等に皆とられたり

○
曲りたる路を變へし時とてころ替へうつり來ませる古き地藏尊
そのかみの江戸砂子にも出て、あらん玉川みちの地藏尊これ

御縁日のその大かたに雨の降れば口さがなきが雨地藏など申す
今日はしも雨の降らねば夕べよりそこらの人の寄りにより來る
小石踏む人の足の音の雨に似てくもれるそらの心もとなき

○
何時か時のわかねど降りと降る雨のとよみのほかにおとなき
降りしきる雨のとよみにわかねども鳴けるがごとし庭の蟋蟀
雨の音のや、静まれば庭の蟲つねのごとくに鳴けるなりけり
いづ方のかげに鳴くらむ蟲のこゑ雨にもめげぬものにぞ有ける
屋根瓦まだ直さねば雨水のまた漏り來むと物すけて置く
聞え來る時計の音は眞夜中とおもひのほかに五時を知らすも

燈火を消ちてし見れば降る雨のをやむ外の面は明け離れたり

朝寒み取り出したる手あぶりの火桶の火の氣なつかしきかな
にはかにも寒くなれば火桶にと俵をやきてわら灰つくる
藁たけばとみに田舎のかをりして秋の朝けのこゝちよきかな
わらの火のしろき煙の庭の木にまつはりなびき田舎おぼゆる
張りさし、明り障子も張り終へぬ風のさむくしならばなりとも
障子たて火桶まさぐりいとはやも冬のこゝろになりけるかな

庭の草木に冬がまへして

冬がまへいざしてやらむ日あたりに寒さよぎつ、春を待ちてな

來む年はよくつちかはむしばらくは土の下にし霜をよぎてよ
草の種さ干す簀子の日だまりに此所をよろしと猫のねむれり

いと／＼寒かりける日

灰の色にみ空けぶりて今日もまた日のかげ見えず雪にし成らし
うなだれし交讓木の上におく霜の終にし解けず日は暮にけり

或る山地にて

世に遠き山また山のおくなれど此所を都と家のつどへる

風呂の火を焚きつ、

かゝなべて日には十日と申したる火焚の翁をおもひつゝ焚く

小崎ひさ子老嫗の許へ言ひ送りける (老嫗は清樂の名手なり)

久方の月の小琴にしたしみし昔おもへばはるけかりけり
春の夜の雨夜しづかに謠はせしその唐韻のわすらえなくに
ねもごろに教へたびぬる唐韻もわするばかりに年ぞ經にける
そのかみをおもひ出だせば足乳根の母もましけり父もましけり
散る花を踏みて訪ひにし辨天の御堂こひしも幾むかしぞも
花散らふ御堂のいほに木琴を聞きふかしつる宵もありしか
ひさかたの月の小琴を取り弾かばけだし昔の歸り來むやいかに

折にふれて

思ふことおもふがまゝに成る見れば心はかよふものにぞ有ける
さはさばれ誠つくして談らざば底のこゝろはかよはざりけり

真心の人のこゝろにかよふ時持たる心のかひをしぞおもふ
真心のかよはずとても真心のかよはむ時の無くばこそあらめ
おのが心人のこゝろにかよはぬは我が真ごゝろの足らぬ成けり
こし方はいまだしかりき行くさきもいまだしからむおのが真心
真心と思ひしことの時過ぎてやさしとおもふこともありけり
真心の研かれ行くか真ごゝろの移ろひ行くか我れにはわかず
うつそみの今の心を真心と我はおもふよ末は知らなく
いかさまに移り行くとも真心に今のこゝろを今はまもらむ
真ごゝろに物を思はゞ大方は道にたがはぬ物にしあるべし

眞心を道の一つにあつめつゝ世にしにのぞまむ時は來にけり
時來りいざとしなりて今さらにおのが心のいたらぬをおもふ
我心弱きなるべし我がこゝろいざとしなればあとじさりする
何事をかへり見もせて進み行く人のこゝろぞうらやまれける
何すれの我が心ぞもかゝる時立ち得ぬ心持つもかひなし
はづかしや火にも水にも入り得ざる心は我のこゝろなりけり

滿蒙事變勃發

つひにしも時のめぐり來ぬ一度は斯くし有らむとおもひ居し事
あら駒の手づな引きしめ時待ちし武夫が手なみなみだぐましも
西東目やそばたてむ世の人の靈も消ぬべき此のはたらきに

らちの外に出でなむとするあら駒の向きを正して時まつ人等
あら駒のくゑはらゝかす雪氷世をすくふべき光りなりけり
然かほあり然かほ有れ共雪に伏す武夫を思へばやすからなくに
こゝをゝしこゝを思へばみ冬過ぎさゝむ春日の待ちどほきかな
皇國を安きに置かむいしすゑをかたむる人等神よ守らさね
世を照らす大き御稜威はさしのぼる朝日のごとく輝けるかも

滿蒙事變勃發に就ての國際聯盟理事會

正しきによりて動かぬ我が國の力は見えつうれしきろかも
然かほあれど斯くなるまでは人しれぬ涙ぐましき働きあるらし

京都へ赴く道すがら遠州濱名湖畔にやどりて

枝かはす松の木間より夕榮の映らふ湖を飽かず見るかな
夕ぐれの光りのこれる水のうへを音せて過ぐる海人小舟かな
舟により行きかひすらし海人としも見えぬ男の子の舟を漕行く
湖の邊にやどる夜よろしいづこをか鳴きわたり行く水戸鷺の聲
舟漕ぎて過ぎ行くならし小夜ふかき枕にちかく海人のこゑする

京都の東山なる津田壽一ぬしの菴に滞在してそこかしこ
見ありきて十日ばかり過しぬる間の歌

男山の茸狩 名を問へば彼ぞ大比枝遙々と小松のうれに遠く霞めり
一つにても我れ自からに在所見付ん物と焦り焦れど
木の本の落葉搔分け思はずも初めて得たり小さけれ共

面白し斯る所に有る物と似たる木の本類りにさがす
小さきをとめ得たりつる其後は仇し茸の外にとめ得ず
方かへてあさる山邊の茸狩友の聲さへ聞えずなりぬ
くたびれて寝轉び仰ぐ大空にちぎれし雲の只一つ行く
又得たりや、大けきが木の本の茂みの横に頭竝べ居り
又も又も大きな物三つ許り松の落葉を潜ぎて出て居り
之をしも終りにはせむ此後を尋ねて得ずば心残らむ
友皆の得つる獲物を集めつゝ落葉に焼て晝餉食べぬ
鴨の聲より明る此宿は都に來ぬるこゝちこそせね
静かなる朝いの床に大寺の木魚つゝ打つ音を聞が宜しさを
東山なる津田氏の菴にて

秋さびしみ寺の横の何所にか柴焚く音の今日も聞ゆる

鐘の音木魚を打つ音鳥の聲爽かにして静けかりけり

龍安寺の池

松杉の静かに映る影の上に浮てかゝれり池の水くさ

こがらめの鳴て木傳ふ池の邊の櫻の紅葉枝のさびたる

池の上に何の音とも別かね共静けき音のしゝに聞ゆる

御室への道

大空の雲も動かぬ秋の日に何も思はずうつらく行く

仁和寺

仁和寺の前の茶店に饅飩食べ心も軽きそゝろ歩行か

大秦廣隆寺

龍安寺仁和寺を過ぎ大秦の深き林を今日は訪ひにき

彌勒菩薩

彌勒菩薩あゝ彌勒菩薩既戸の皇子をしぞ思ふ此御佛に

貴船詣

鞍馬路を牛追ひ登る黒牛に赤き紐付け牛追ひのぼる

天ぞゝる岨の杉村立ち盡し我が見てあれば極鳥の鳴

後ろより吹き登り來る追風に寒さ覺ゆれ山深からし

小車にのせ行く見れば貴船人都へ運ぶ檜はだなり梟

頼みある雲の影哉一時雨かゝらばと思ふ杉の木立に

御社の蔭に寄り居て幽かなる落葉の上の時雨をぞ聞く

さながらに杉の雫と思ほゆる貴船の奥の村時雨かな

近き杉やゝ遠き杉遠山の杉杉ならぬながめしも有らず

貴船山路 (龍歌)

高嶺迄しみさび續く杉山の雨をはるく仰ぎ見る哉

秋深き貴船詣のよろしきに時雨をさへに伴なひに梟